

第4章 子どもの学び

1. 授業の理解度と分からなくなってきた時期

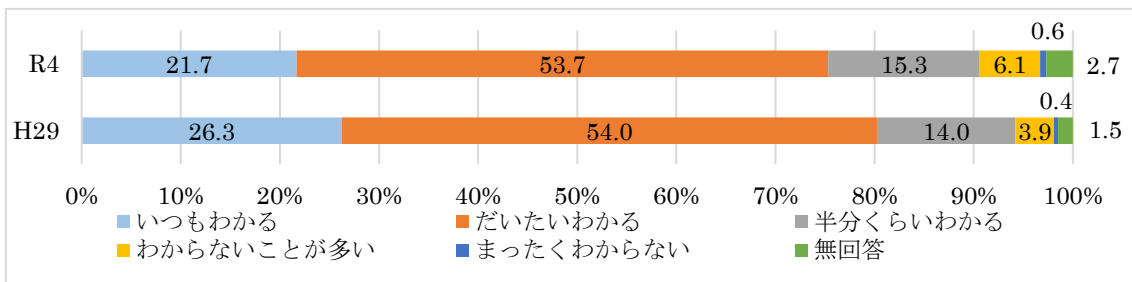
本章では、子どもの学びについて分析を行う。本調査では、子ども票にて、問 23「あなたは、学校の授業がわからないことがありますか。」の設問で聞いており、「いつもわかる」「だいたいわかる」「半分くらいわかる」「わからないことが多い」「まったくわからない」の5つの選択肢から答えてもらっている。そこで、本設問の回答を授業理解度の指標として用いる。

(1) 授業の理解度

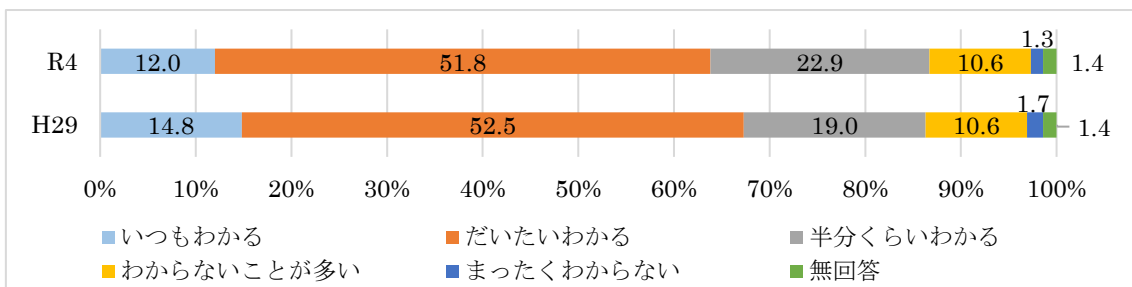
授業が「いつもわかる」または「だいたいわかる」と回答した小学5年生は、合わせると75.4%であった。一方で6.7%は授業がわからない（「わからないことが多い」6.1%、「まったくわからない」0.6%）と回答している。前回調査（H29）では、「いつもわかる」が26.3%、「だいたいわかる」が54.0%だった。前回調査（H29）と比較すると、「いつもわかる」の割合が減少しており、「わからないことが多い」と「半分くらいわかる」の割合が高くなっている。

中学2年生においては、小学5年生に比べて、授業が「いつもわかる」「だいたいわかる」と答える子どもが少なく、授業が「いつもわかる」と回答した割合は12.0%であった。その一方で、11.9%は授業がわからない（「わからないことが多い」10.6%と「まったくわからない」1.3%の合計）と回答している。前回調査（H29）では、授業が「いつもわかる」と回答した割合は14.8%であった。授業がわからない割合（「わからないことが多い」10.6%、「まったくわからない」1.7%の合計）は12.3%だった。

図表 4-1-1 授業の理解度(小学5年生):全体(***)



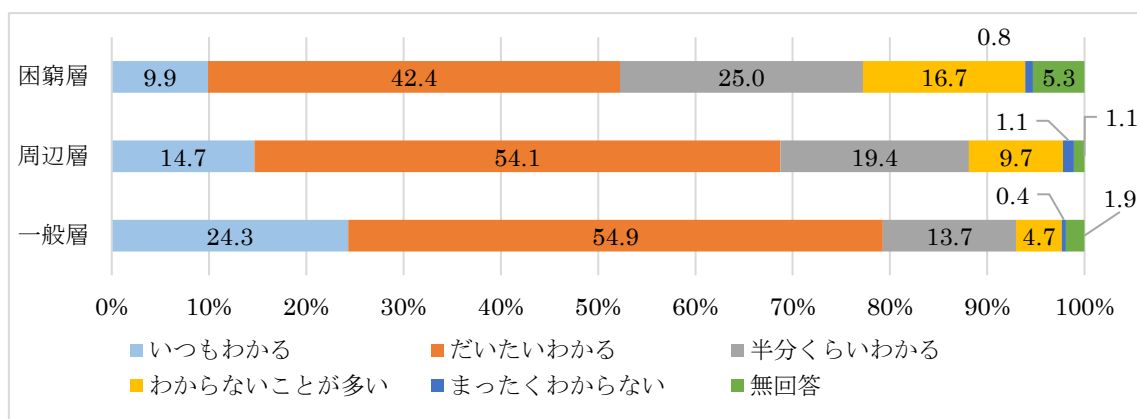
図表 4-1-2 授業の理解度(中学2年生):全体(**)



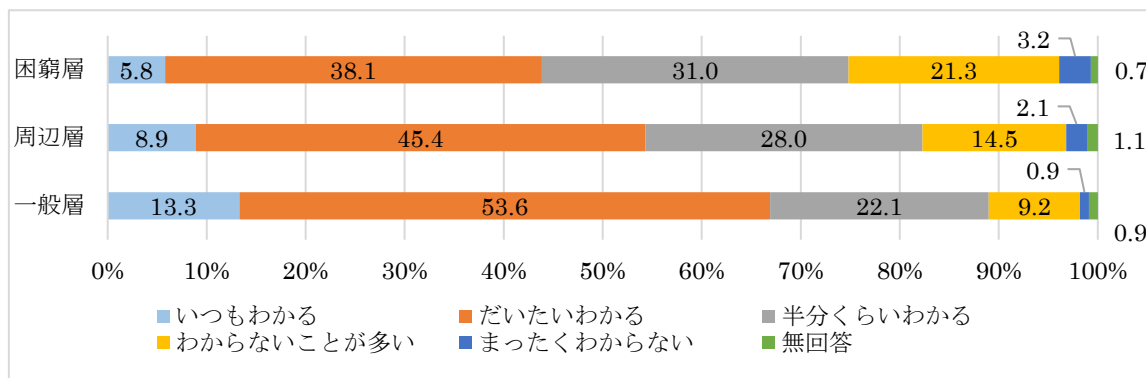
生活困難度別に見ると、小学 5 年生、中学 2 年生ともに統計的に有意な差が見られた。小学 5 年生では、授業が「いつも」または「だいたい」わかるのは、一般層で 79.2%であるのに対し、周辺層では 68.8%、困窮層では 52.3%と、一般層と比べて周辺層では 10.4 ポイント、困窮層では 26.9 ポイント低い。また「いつもわかる」と答えた子どもは一般層では 24.3%であるのに対し、困窮層では 9.9%にとどまった。さらに、前回調査(H29)では授業が「いつも」わかると回答した子どもは、困窮層と周辺層でどちらも 22.1%であるのに対し、本調査(R4)ではそれぞれ 9.9%、14.7%であり、困窮層では 12.2 ポイント、周辺層では 7.4 ポイントと大幅に理解度が減少しており、統計的に有意差も見られた。

中学 2 年生では、授業が「いつもわかる」「だいたいわかる」は、一般層で 66.9%であるのに対し、周辺層では 54.3%、困窮層では 43.9%にとどまる。前回調査(H29)では、統計的に有意な差は見られないものの、授業が「いつも」わかる困窮層と周辺層はそれぞれ 8.5%、11.0%であるのに対し、本調査(R4)ではそれぞれ 5.8%、8.9%であり、困窮層では 2.7 ポイント、周辺層では 2.1 ポイントと理解度が減少している。

図表 4-1-3 授業の理解度(小学 5 年生):生活困難度別(***)

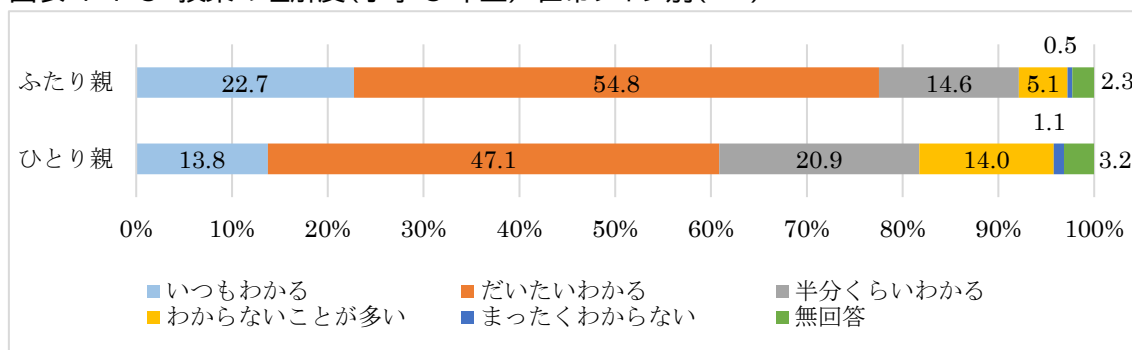


図表 4-1-4 授業の理解度(中学 2 年生):生活困難度別(***)

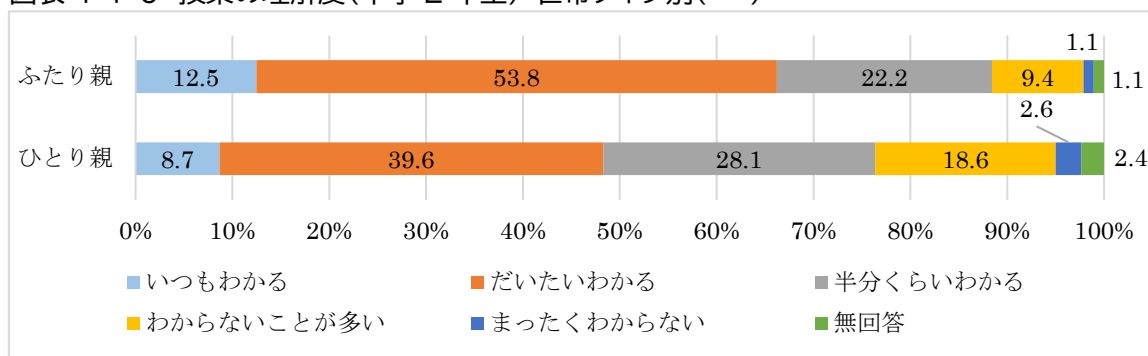


小学5年生では、世帯タイプ別に見ると、授業が「いつもわかる」または「だいたいわかる」のは、ふたり親世帯で77.5%であるのに対し、ひとり親世帯では60.9%と、およそ16.6ポイント低く、統計的に有意な差が見られた。中学2年生では、授業が「いつもわかる」または「だいたいわかる」は、ふたり親世帯で66.3%であるのに対し、ひとり親世帯では48.3%と、およそ18.0ポイント低く、統計的に有意な差が見られた。

図表 4-1-5 授業の理解度(小学5年生):世帯タイプ別(***)



図表 4-1-6 授業の理解度(中学2年生):世帯タイプ別(***)



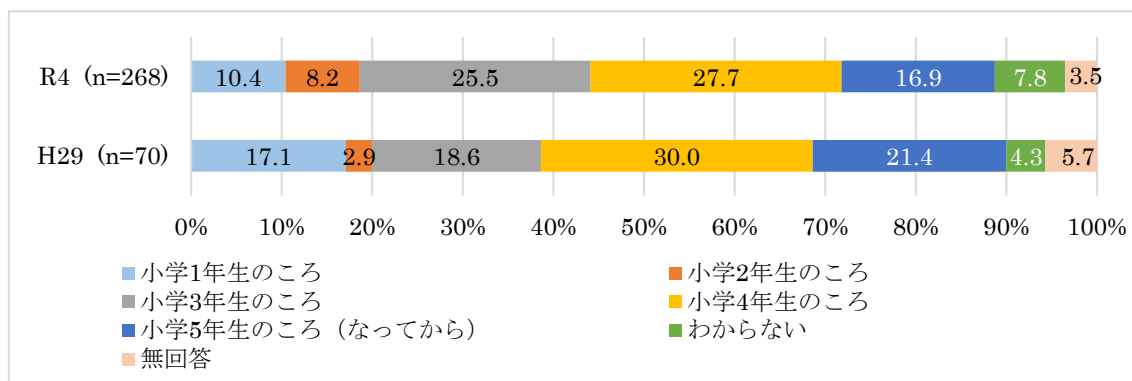
(2) 授業がわからなくなってきた時期

子ども票の問23にて授業が「わからないことが多い」もしくは「まったくわからない」と答えた子どもたちに、問23-1「いつごろから、授業がわからなくなりましたか。」と質問した。小学5年生では、「小学4年生のころ」がもっとも多く27.7%であった。「小学1年生のころ」及び「小学2年生のころ」と回答した子どもの割合は合計して18.6%であった。その一方で、「小学5年生のころ(なってから)」(本調査は8月に実施されたため、5年生1学期の間に)わからなくなったのは、16.9%である。なお、分析に耐えうる十分なケース数を確保できていないため、生活困難度別ならびに世帯タイプ別の分析は行わなかった。前回調査(H29)では、わからなくなった時期でもっとも回答が多かったのは「小学4年生のころ」であり、30.0%であった。

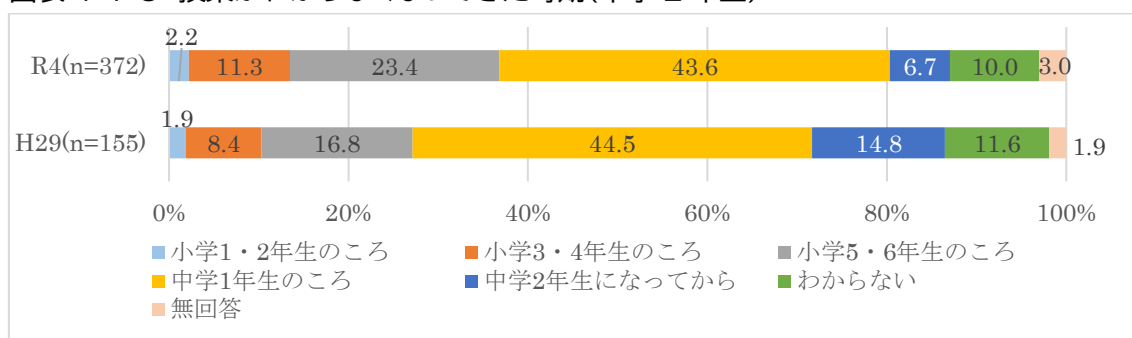
中学2年生では、小学生の頃にわからなくなったと答えた割合は36.9%（「小学1・2年生のころ」「小学3・4年生のころ」「小学5・6年生のころ」と回答した割合を合計）であった。また、「中学1年生のころ」にわからなくなったと回答した割合は43.6%であった。前回調査

(H29)では、小学生の頃にわからなくなったと答えた割合は27.1%（「小学1・2年生のころ」「小学3・4年生のころ」「小学5・6年生のころ」と回答した割合を合計）であった。また、「中学1年生のころ」にわからなくなったと答えた割合は44.5%であった。中学2年生においても、小学5年生と同様に、分析に耐えうる十分なケース数を確保できていないため、生活困難度別ならびに世帯タイプ別の分析は行っていない。

図表 4-1-7 授業がわからなくなってきた時期(小学5年生)



図表 4-1-8 授業がわからなくなってきた時期(中学2年生)



2. 学校外での学習の状況

(1) 勉強がわからない時に教えてもらう人

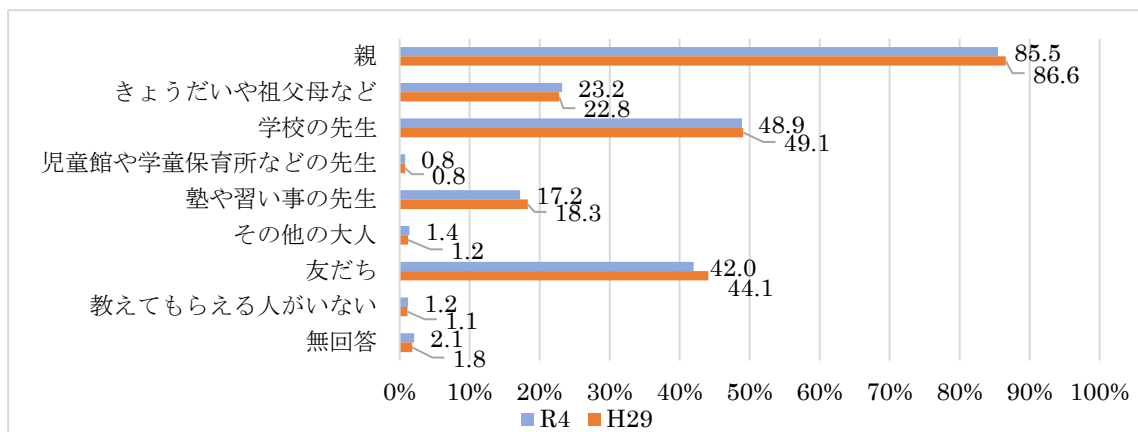
次に、子どもの学習資源に着目する。まず、勉強がわからない時、教えてもらう人がいるかを、子ども票の間 24「勉強がわからないときは、だれに教えてもらいますか」への回答(複数回答)を用いて確認する。

小学5年生では、「親」がもっとも多く、85.5%、次いで「学校の先生」が48.9%、「友だち」が42.0%、「きょうだいや祖父母など」が23.2%と続く。また、「教えてもらえる人はいない」と答えた小学5年生は1.2%であった。「児童館や学童保育所などの先生」「その他の大人」に教えてもらうと回答した子どもは、0.8%、1.4%と少数にとどまる。前回調査(H29)では「親」は86.6%、「学校の先生」が49.1%、「友だち」が44.1%であった。

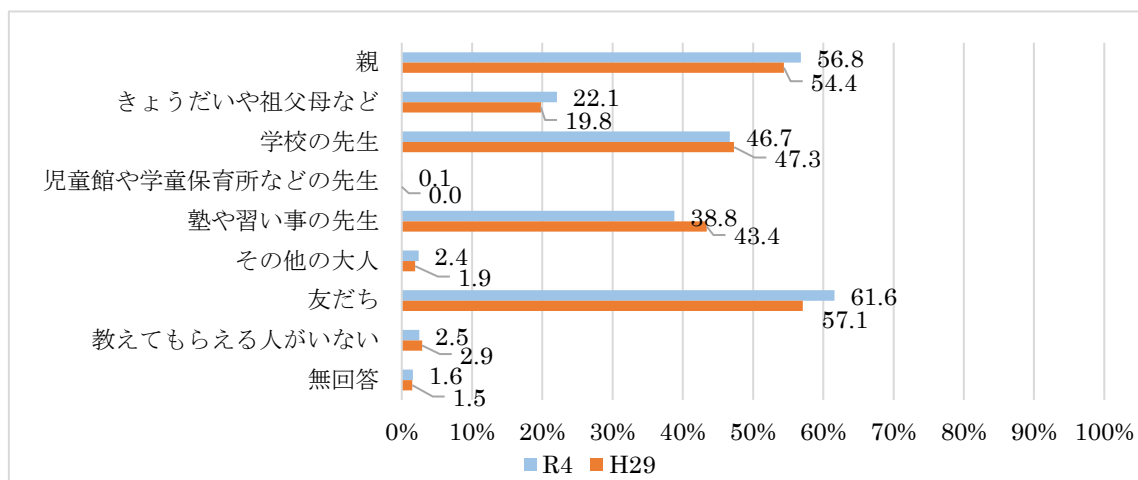
中学2年生では、勉強がわからない時に教えてもらう人として、もっとも多かったのは、「友だち」であり61.6%、次が「親」の56.8%となっている。また、「学校の先生」が46.7%、「塾

や習い事の先生」が 38.8%の順となっており、小学 5 年生では「親」が圧倒的に多く、中学 2 年生では親以外の人にも勉強を教えてもらっているケースが多い。一方、「教えてもらう人がいない」と回答した子どもは 2.5%と小学 5 年生の 1.2%より大きくなっている。前回調査 (H29)では、「友だち」が 57.1%、「親」が 54.4%、「学校の先生」が 47.3%、「塾や習い事の先生」が 43.4%であった。

図表 4-2-1 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学 5 年生):全体(複数回答)



図表 4-2-2 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):全体(複数回答)

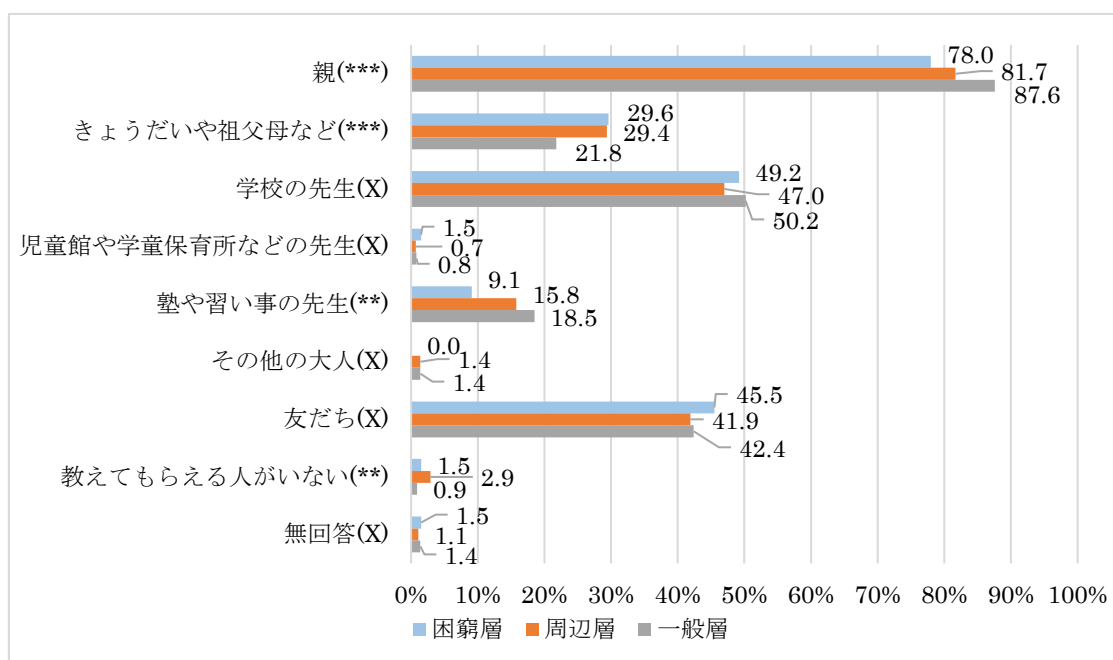


※H29 年度の調査票では、「児童館や学童保育所などの先生」の項目がないため 0%とした。

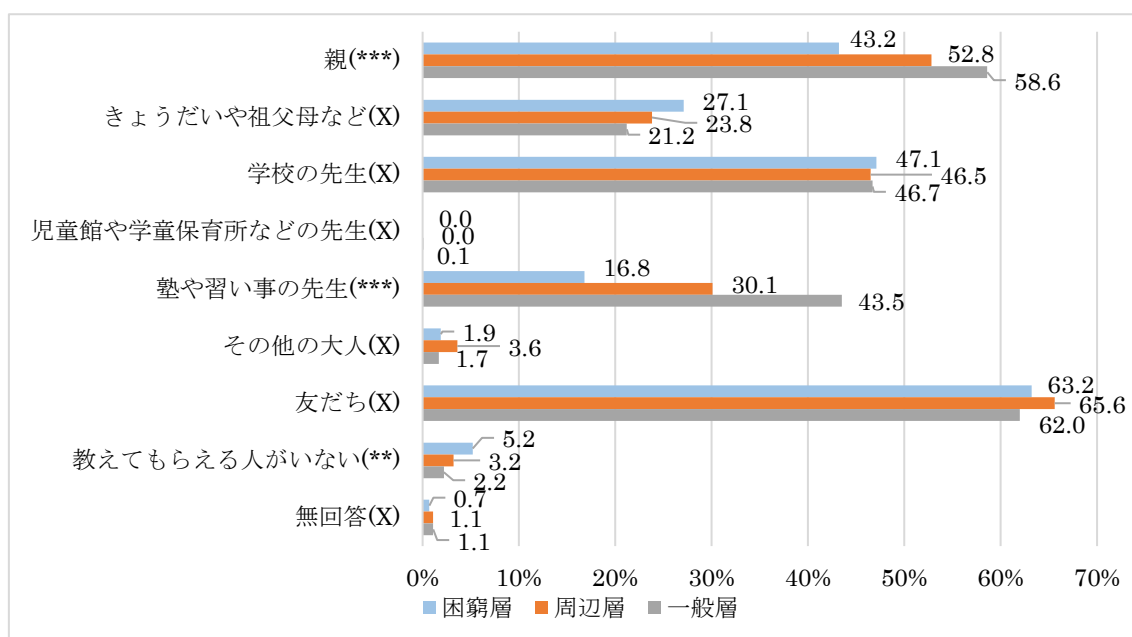
小学 5 年生の生活困難度別では、「親」「きょうだいや祖父母など」「塾や習い事の先生」「教えてもらえる人がいない」のみ統計的に有意な差が見られた。「親」に教わっている割合は、一般層は 87.6%であるが、困窮層では 78.0%と 9.6 ポイント低い。「塾や習い事の先生」に教わっている割合も、一般層は 18.5%であるが、困窮層では 9.1%と 9.4 ポイント低い。一方で、「きょうだいや祖父母など」に教わっている割合は、一般層は 21.8%であるが、困窮層では 29.6%、周辺層では 29.4%と、困窮層、周辺層のほうが約 7 ポイント高い。「教えてもらえる人がいない」においては、一般層は 0.9%に比べて、困窮層では 1.5%であり、困窮層のほうが高くなっている。

中学 2 年生の生活困難度別では、「親」「塾や習い事の先生」「教えてもらえる人がいない」のみ統計的に有意な差が見られた。「親」に教わっている割合は、一般層は 58.6%であるが、困窮層では 43.2%と 15.4 ポイント低い。「塾や習い事の先生」に教わっている割合は、一般層は 43.5%であるが困窮層では 16.8%と 26.7 ポイント低い。一方で、「教えてもらえる人がいない」割合は、一般層では 2.2%であるが、困窮層では 5.2%と、困窮層のほうが 3.0 ポイント高くなっている。

図表 4-2-3 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学 5 年生):生活困難度別



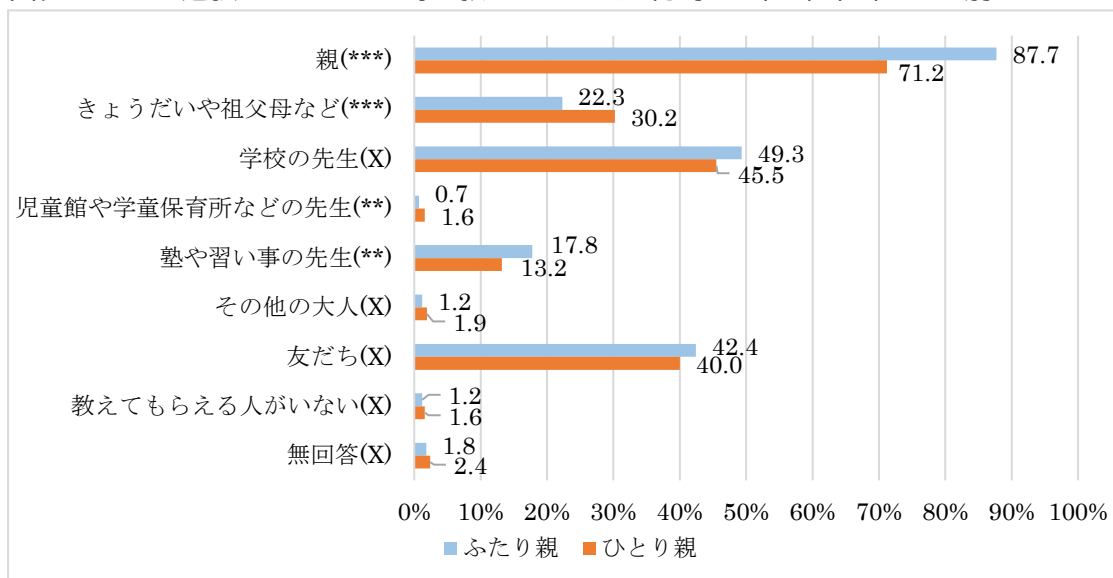
図表 4-2-4 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):生活困難度別



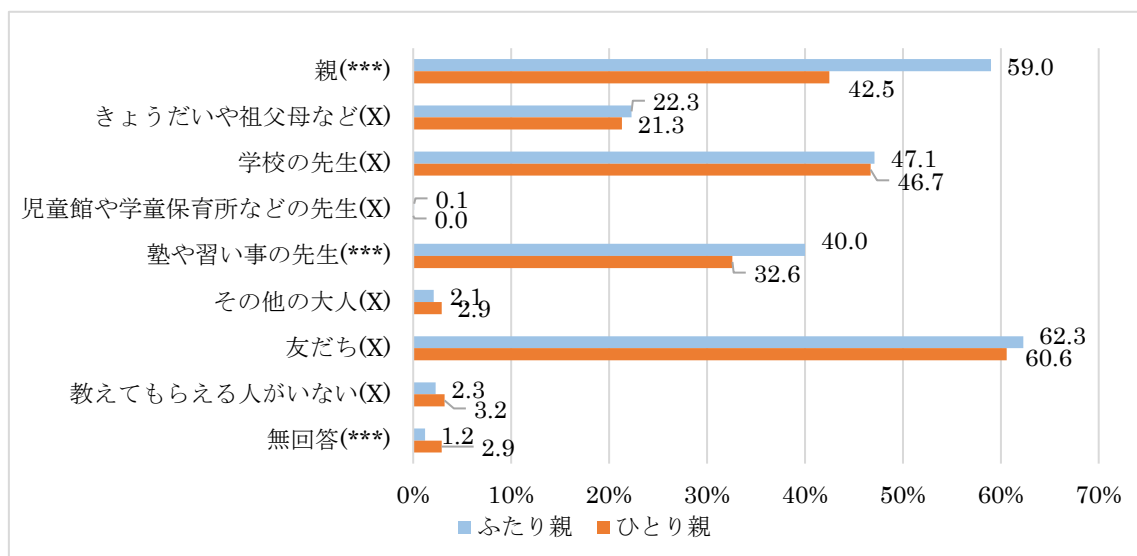
小学5年生の世帯タイプ別では、「親」「きょうだいや祖父母など」「児童館や学童保育所などの先生」「塾や習い事の先生」のみ統計的に有意な差が見られた。「親」に教わっている割合は、ふたり親世帯では87.7%であるが、ひとり親世帯では71.2%と16.5ポイント低い。「塾や習い事の先生」に教わっている割合は、ふたり親世帯は17.8%であるが、ひとり親世帯では13.2%と4.6ポイント低い。一方で、「きょうだいや祖父母など」に教わっている割合は、ふたり親世帯では22.3%であるが、ひとり親世帯では30.2%であり、ひとり親世帯のほうが7.9ポイント高い。また、「児童館や学童保育所などの先生」も、ふたり親世帯では0.7%であるが、ひとり親世帯では1.6%であり、ひとり親世帯のほうが0.9ポイント高くなっている。

中学2年生の世帯タイプ別では、「親」「塾や習い事の先生」「無回答」のみ統計的に有意な差が見られた。「親」に教わっている割合は、ふたり親世帯では59.0%であるが、ひとり親世帯では42.5%であり、ひとり親世帯のほうが16.5ポイント低い。同様に、「塾や習い事の先生」に教わっている割合も、ふたり親世帯では40.0%であるが、ひとり親世帯では32.6%であり、ひとり親世帯のほうが7.4ポイント低くなっている。

図表 4-2-5 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学5年生):世帯タイプ別



図表 4-2-6 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):世帯タイプ別

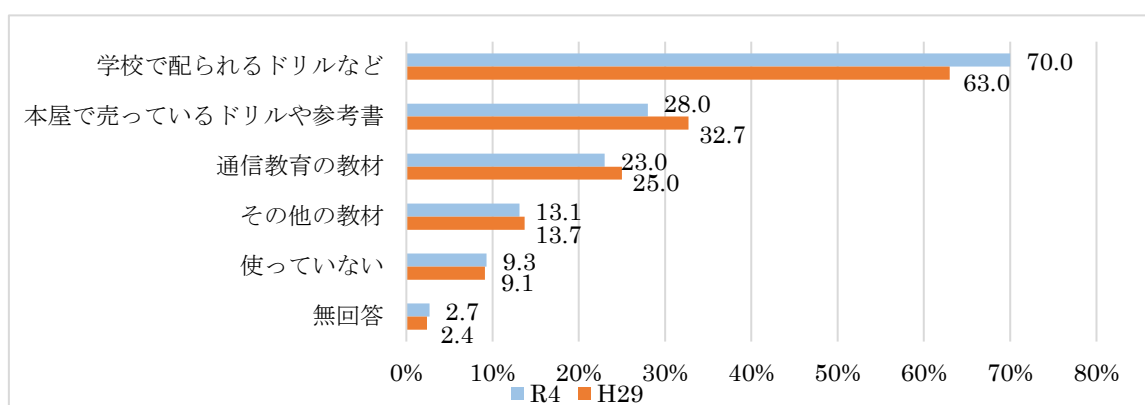


(2)家庭学習教材

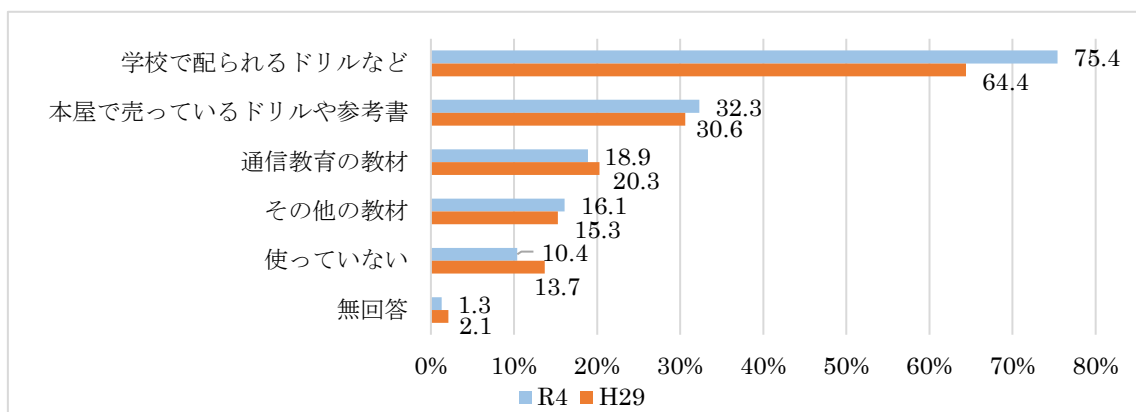
次に、自宅で勉強するときを使う教材について、子ども票の間 28「あなたは、自宅で以下の教材を使っていますか」への回答(複数回答)を用いて確認した。小学 5 年生では、「学校で配られるドリルなど」を使っていると答えたのは 70.0%でありもっとも多く、次いで「本屋で売っているドリルや参考書」が 28.0%、「通信教育の教材」が 23.0%、「その他の教材」が 13.1%であった。一方で、小学 5 年生の 9.3%は教材を使って勉強していない。前回調査(H29)では、「学校で配られるドリルなど」が 63.0%、「本屋で売っているドリルや参考書」が 32.7%、「通信教育の教材」が 25.0%であった。

中学 2 年生の家庭における学習教材については、75.4%は「学校で配られるドリルなど」を使っており、次いで、「本屋で売っているドリルや参考書」が 32.3%、「通信教育の教材」が 18.9%、「その他の教材」が 16.1%であった。また、中学 2 年生の 10.4%は教材を使って勉強していない。前回調査(H29)では、「学校で配られるドリルなど」が 64.4%、「本屋で売っているドリルや参考書」が 30.6%、「通信教育の教材」が 20.3%であった。

図表 4-2-7 家庭学習教材(小学 5 年生):全体(複数回答)



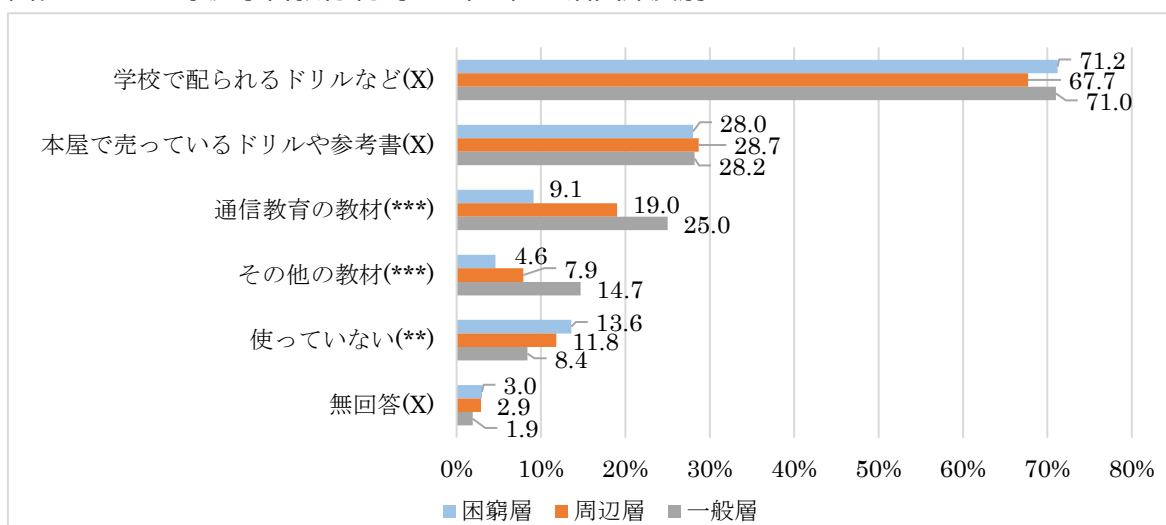
図表 4-2-8 家庭学習教材(中学 2 年生):全体(複数回答)



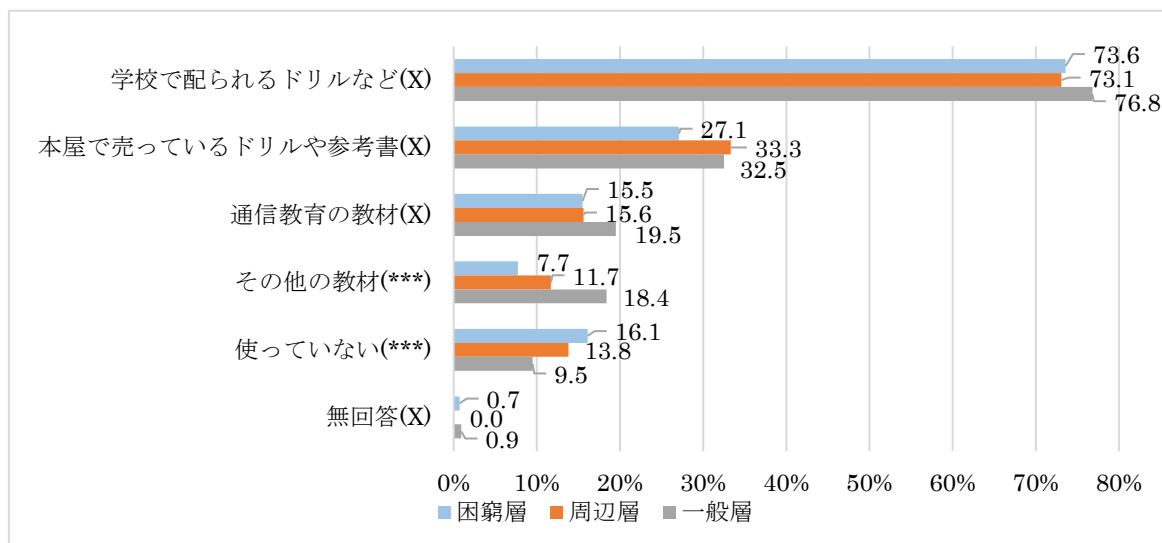
小学 5 年生の生活困難度別においては、「通信教育の教材」「その他の教材」「使っていない」のみ統計的に有意な差が見られた。「通信教育の教材」を使用している割合は、一般層は 25.0%であるが、困窮層では 9.1%と 15.9 ポイント低い。「その他の教材」を使用している割合も、一般層は 14.7%であるが、困窮層では 4.6%と 10.1 ポイント低い。一方で、「使っていない」においては、一般層では 8.4%であるが、困窮層では 13.6%であり、困窮層のほうが 5.2 ポイント高い。

中学 2 年生の生活困難度別においては、「その他の教材」「使っていない」のみ統計的に有意な差がみられた。「その他の教材」は一般層では 18.4%であるが、困窮層では 7.7%と 10.7 ポイント低い。家庭学習教材を「使っていない」割合は、一般層では 9.5%であるのに対して、困窮層では 16.1%と 6.6 ポイント高い。

図表 4-2-9 家庭学習教材(小学 5 年生):生活困難度別



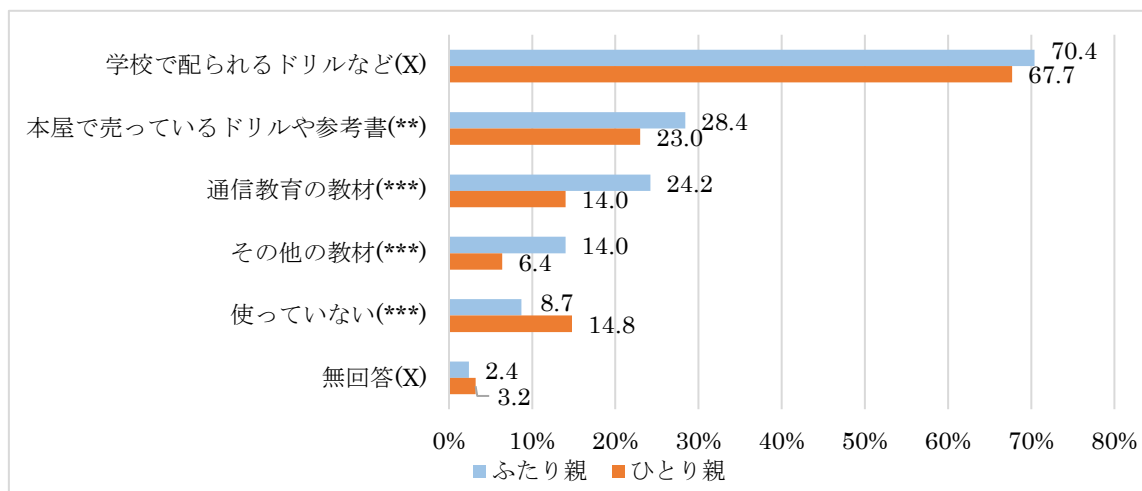
図表 4-2-10 家庭学習教材(中学 2 年生):生活困難度別



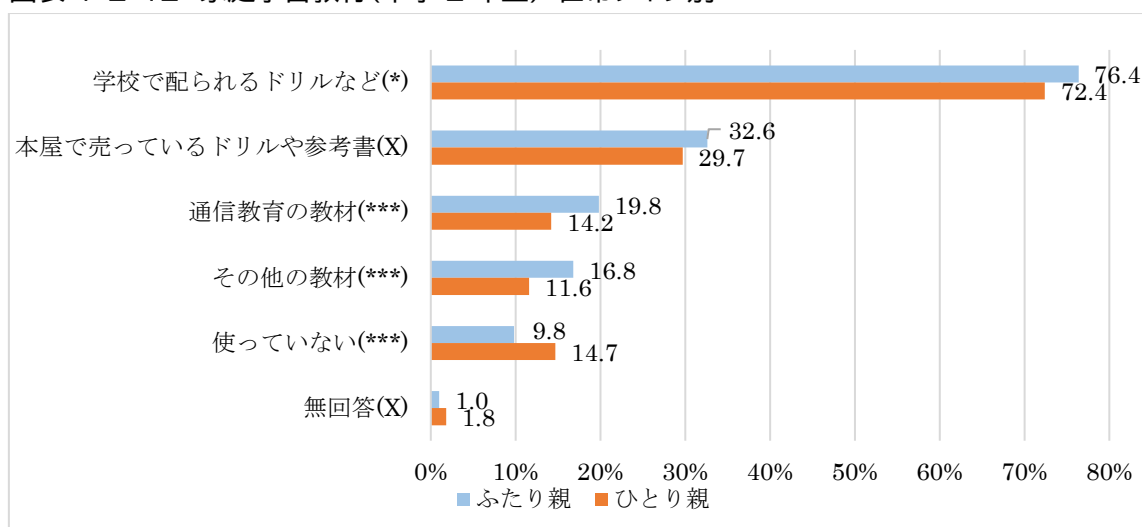
小学 5 年生の世帯タイプ別では、「本屋で売っているドリルや参考書」「通信教育の教材」「その他の教材」「使っていない」で統計的に有意な差が見られた。「本屋で売っているドリルや参考書」を使用している割合は、ふたり親世帯では 28.4% であるが、ひとり親世帯では 23.0% と 5.4 ポイント低い。また、「通信教育の教材」「その他の教材」でもひとり親世帯のほうが使用率が低い傾向が見られた。「通信教育の教材」では、ふたり親世帯は 24.2% であるが、ひとり親世帯は 14.0% と 10.2 ポイント低く、「その他の教材」でも、ふたり親世帯は 14.0% であるが、ひとり親世帯は 6.4% と 7.6 ポイント低くなっている。一方で、家庭学習教材を「使っていない」と答えた割合は、ふたり親世帯では 8.7% であるが、ひとり親世帯では 14.8% と、ひとり親世帯のほうが 6.1 ポイント高くなっている。

中学 2 年生の世帯タイプ別では、「学校で配られるドリルなど」「通信教育の教材」「その他の教材」「使っていない」で統計的に有意な差が見られた。「学校で配られるドリルなど」を使用している割合は、ふたり親世帯では 76.4% であるが、ひとり親世帯では 72.4% と 4 ポイント低い。また、「通信教育の教材」「その他の教材」でも同様の傾向が見られ、「通信教育の教材」では、ふたり親世帯では 19.8% であるが、ひとり親世帯では 14.2% と 5.6 ポイント低い。「その他の教材」でも、ふたり親世帯では 16.8% であるが、ひとり親世帯では 11.6% と 5.2 ポイント低い。一方で、家庭学習教材を「使っていない」割合は、ふたり親世帯では 9.8% であるが、ひとり親世帯では 14.7% と、ひとり親世帯のほうが 4.9 ポイント高くなっている。

図表 4-2-11 家庭学習教材(小学 5 年生):世帯タイプ別



図表 4-2-12 家庭学習教材(中学 2 年生):世帯タイプ別



(3)通塾の状況

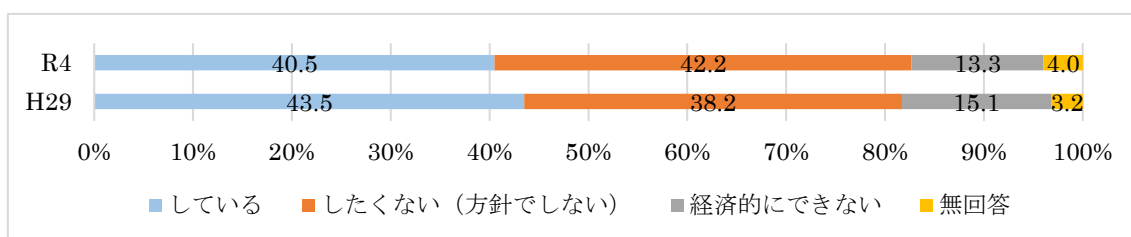
通塾の状況については、保護者票の問 31「D 子どもを学習塾に通わせる(または家庭教師に来てもらう)」を用いて確認する。回答の選択肢は、「している」「していない、したくない(家庭の方針でしない)」「していない、経済的にできない」の 3 つを用意している。2 つ目の選択肢を設けたのは、家庭の方針で通塾や家庭教師が必要でないと保護者が判断している場合も考えられるからである。3 つ目の選択肢は、保護者が通わせたいと思っているものの、金銭的な制約で通わすことができない場合に該当する。

この結果、小学 5 年生の保護者の 40.5%が塾に通わせていると答えている。「(方針で)通わせていない」のは、42.2%である。一方で、保護者の 13.3%は「経済的に(通わすことが)できない」と回答している。前回調査(H29)では、保護者の 43.5%が塾に通わせていると答えており、「(方針で)通わせていない」は 38.2%、「経済的に(通わすことが)できない」は

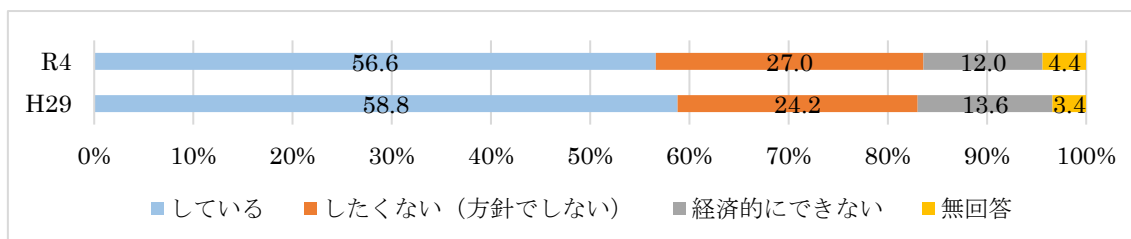
15.1%であった。

中学 2 年生では、56.6%が学習塾に通っている、または家庭教師に来てもらうと回答している。「(方針で)通わせていない」のは 27.0%である一方で、保護者の 12.0%は「経済的に(通わすことが)できない」と回答している。前回調査(H29)では保護者の 58.8%が塾に通わせていると答えており、「(方針で)通わせていない」は 24.2%、「経済的に(通わすことが)できない」は 13.6%であった。

図表 4-2-13 子どもを塾に通わせている割合(小学 5 年生):全体



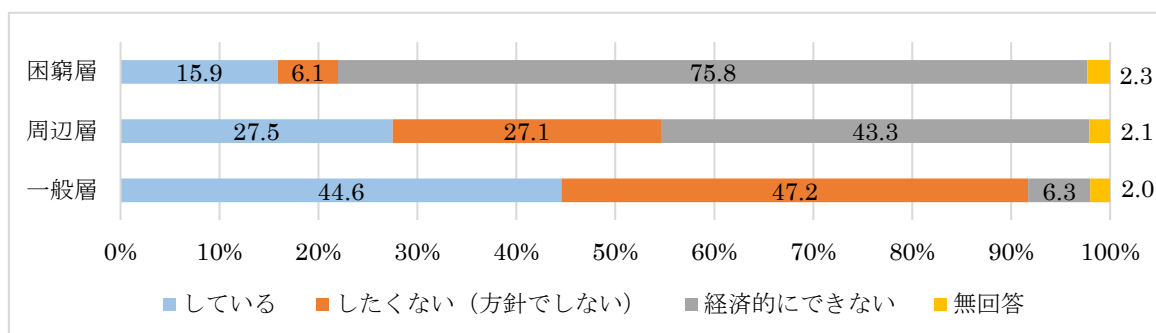
図表 4-2-14 子どもを塾に通わせている(中学 2 年生):全体



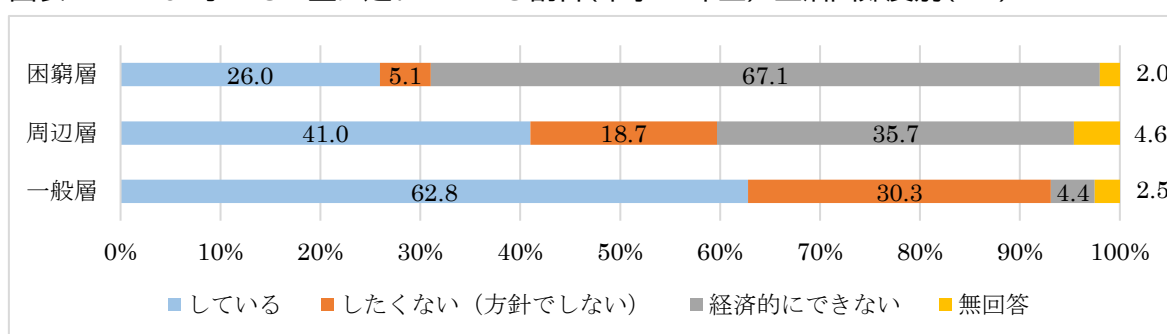
小学 5 年生について生活困難度別で見ると、統計的に有意な差が見られた。小学 5 年生の一般層の 44.6%が塾に行っている、または家庭教師に来てもらっている一方で、困窮層は 15.9%にとどまり、28.7 ポイントの差がある。「(方針で)通わせていない」と答えた保護者は、困窮層では 6.1%であるが、一般層では 47.2%と、一般層のほうが 41.1 ポイント高くなっている。一方で、「経済的に(通わすことが)できない」と回答した割合は、一般層では 6.3%であるのに対し、困窮層では 75.8%にもおよび、一般層との差は 69.5 ポイントになる。

中学 2 年生について生活困難度別に見ると、一般層の 62.8%が塾に行っている、または家庭教師に来てもらっているのに対し、困窮層は 26.0%と、その差は 36.8 ポイントになる。「(方針で)通わせていない」と回答したのは、一般層では 30.3%であるのに対し、困窮層では 5.1%と 25.2 ポイント低い。一方で、「経済的に(通わすことが)できない」と回答した割合は、一般層では 4.4%であるのに対し、困窮層では 67.1%であり、困窮層のほうが 62.7 ポイント高くなっている。

図表 4-2-15 子どもを塾に通わせている割合(小学 5 年生):生活困難度別(***)



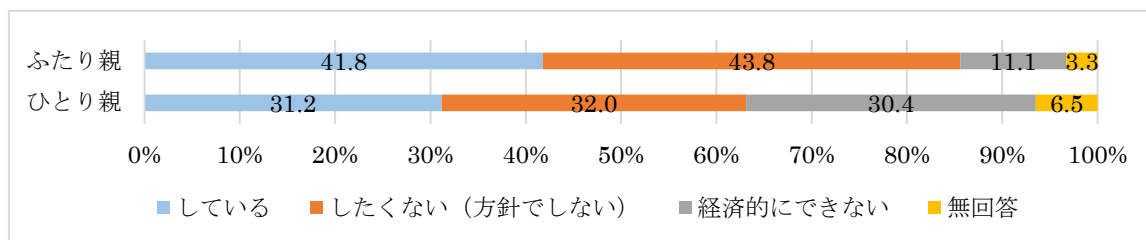
図表 4-2-16 子どもを塾に通わせている割合(中学 2 年生):生活困難度別(***)



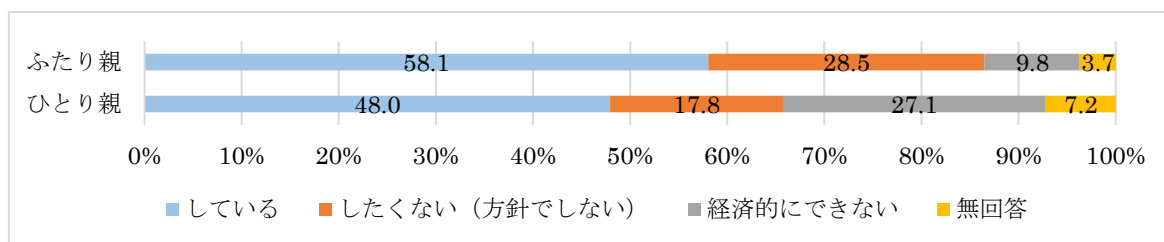
小学 5 年生について世帯タイプ別で見ると、統計的に有意な差が見られた。ふたり親世帯の 41.8% が塾に行っている、または家庭教師に来てもらっている一方で、ひとり親世帯では 31.2% となり、ひとり親世帯のほうが 10.6 ポイント低い。「(方針で)通わせていない」と答えた保護者は、ふたり親世帯では 43.8% であるが、ひとり親世帯では 32.0% であり、ひとり親世帯のほうが 11.8 ポイント低い。一方で、「経済的に(通わすことが)できない」と回答した割合は、ふたり親世帯では 11.1% であるが、ひとり親世帯では 30.4% であり、ひとり親世帯のほうが 19.3 ポイント高い。

中学 2 年生について世帯タイプ別で見ると、ふたり親世帯の 58.1% が塾に行っている、または家庭教師に来てもらっているのに対し、ひとり親世帯は、48.0% であり、ひとり親世帯のほうが 10.1 ポイント低い。「(方針で)通わせていない」と答えた保護者は、ふたり親世帯では 28.5% であるが、ひとり親世帯では 17.8% であり、ひとり親世帯のほうが 10.7 ポイント低い。一方で「経済的に(通わすことが)できない」と回答した割合は、ふたり親世帯では 9.8% であるのに対し、ひとり親世帯では 27.1% であり、ひとり親世帯のほうが 17.3 ポイント高くなっている。

図表 4-2-17 子どもを塾に通わせている割合(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



図表 4-2-18 子どもを塾に通わせている割合(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)

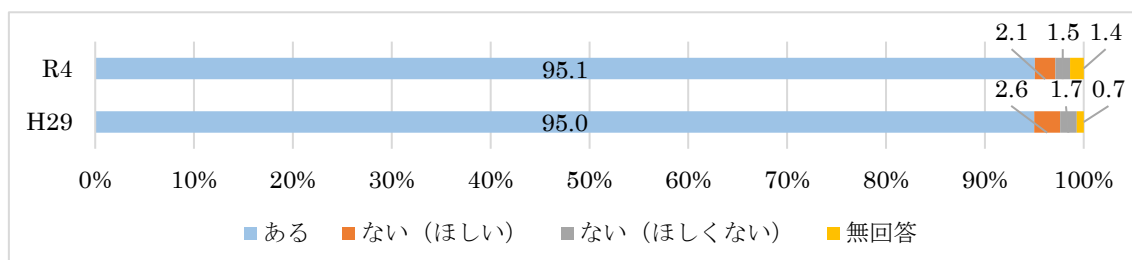


3. 学習環境の欠如(勉強する場所・勉強机・本・インターネットなど)

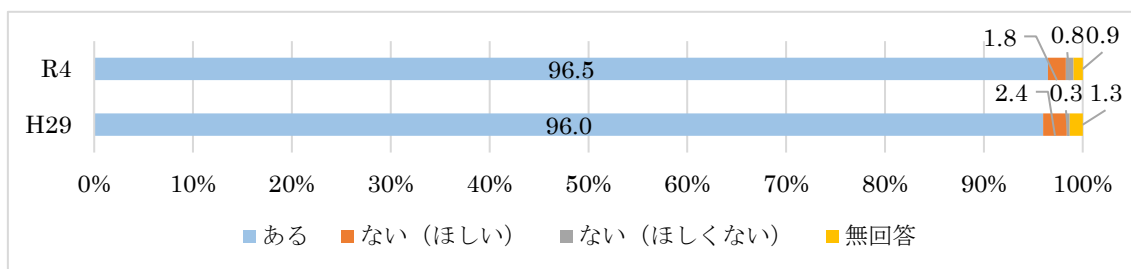
本節では、子どもが家庭学習をするための環境がどれほど整っているのかを見るために、家庭における勉強場所、勉強机、本、パソコン、インターネットの所有状況を分析する。子ども本人に問 2「あなたには、自分が使うことができる、以下のものがありますか」という設問において、「自宅で宿題をすることができる場所」「自分専用の勉強机」「自分だけの本(学校の教科書やマンガはのぞく)」「(自宅で)インターネットにつながるパソコン・タブレット」の項目それぞれに対して、「ある」「ない(ほしい)」「ない(ほしくない)」の3つの選択肢から回答してもらった。

まず、「自宅で宿題ができる場所」については、小学 5 年生、中学 2 年生のそれぞれ 95.1%、96.5%が「ある」としている一方、それぞれ 2.1%、1.8%が「ない(ほしい)」と回答している。前回調査(H29)では、小学 5 年生、中学 2 年生のそれぞれ 95.0%、96.0%が「ある」としている一方、それぞれ 2.6%、2.4%が「ない(ほしい)」と回答していた。

図表 4-3-1 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(小学 5 年生):全体



図表 4-3-2 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(中学 2 年生):全体

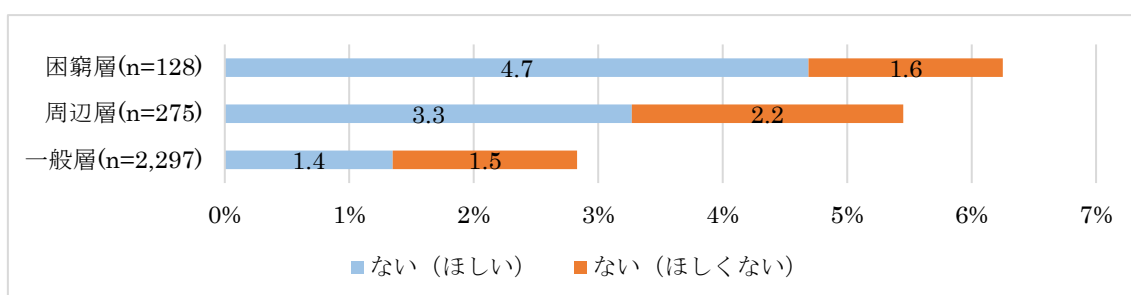


「自宅で宿題ができる場所」について、生活困難度別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学校 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 1.4%であるが、困窮層では 4.7%と 3.3 ポイント高い。

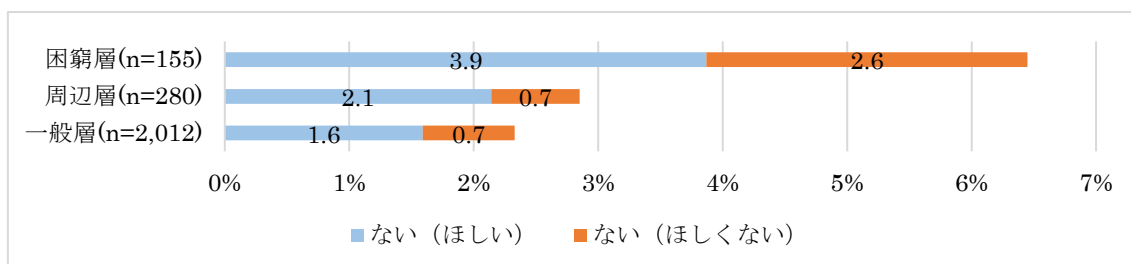
中学 2 年生でも同様の傾向が見られ、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 1.6%であるが、困窮層では 3.9%と 2.3 ポイント高い。

図表 4-3-3 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(小学 5 年生):生活困難度別 (***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

図表 4-3-4 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(中学 2 年生):生活困難度別 (***)



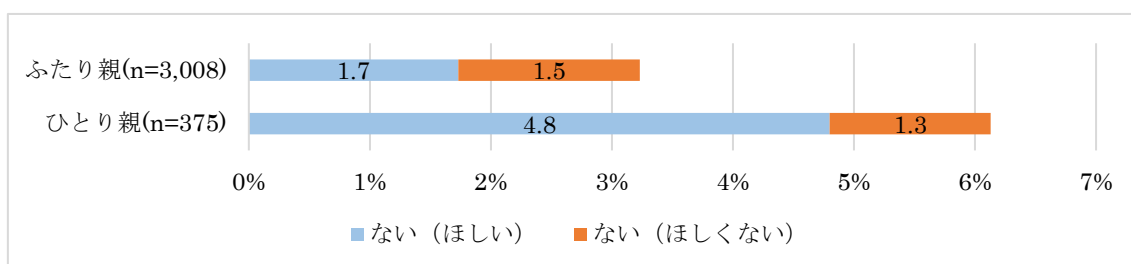
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

「自宅で宿題をすることができる場所」について、世帯タイプ別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生では、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 1.7%であるが、ひとり親世帯では 4.8%であり、ひとり親世帯のほうが 3.1 ポイント高い。

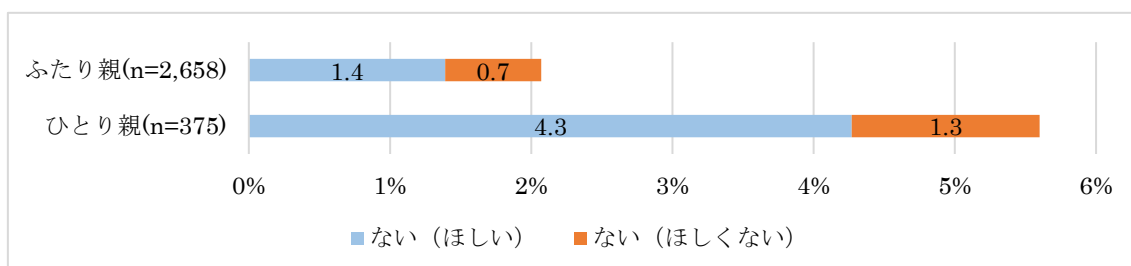
中学 2 年生でも同様の傾向が見られ、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 1.4%であるのに対し、ひとり親世帯では 4.3%と、ひとり親世帯のほうが 2.9 ポイント高い。

図表 4-3-5 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

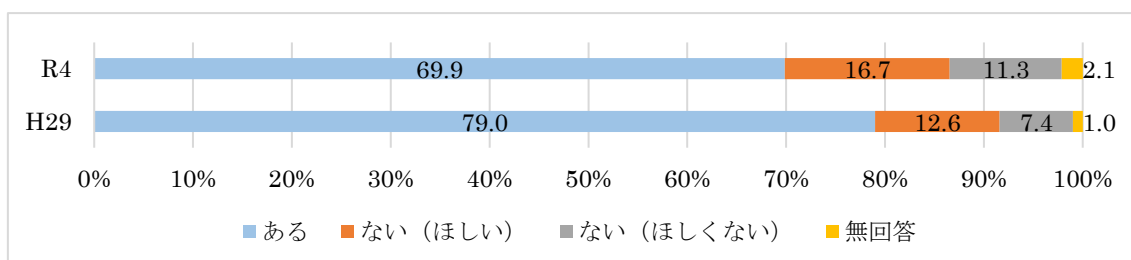
図表 4-3-6 「自宅で宿題をすることができる場所」の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)



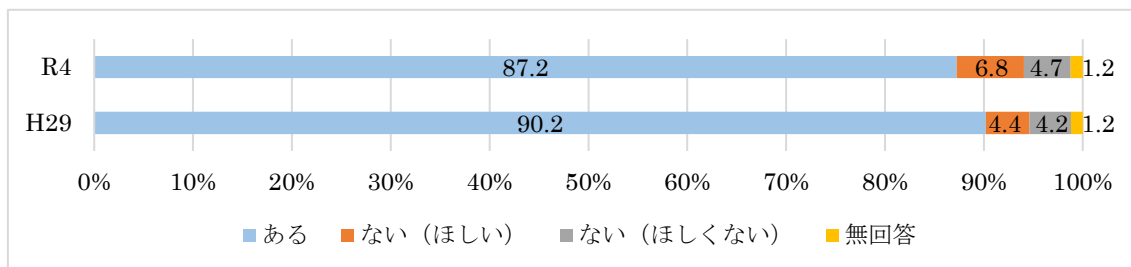
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

次に、「自分専用の勉強机」については、小学 5 年生の 69.9%、中学 2 年生の 87.2%が「ある」と答えている一方で、小学 5 年生の 16.7%、中学 2 年生の 6.8%が「ない(ほしい)」としている。前回調査(H29)では小学 5 年生の 79.0%、中学 2 年生の 90.2%が「ある」と答えている一方で、小学 5 年生の 12.6%、中学 2 年生の 4.4%が「ない(ほしい)」であった。

図表 4-3-7 「自分専用の勉強机」の有無(小学 5 年生):全体



図表 4-3-8 「自分専用の勉強机」の有無(中学 2 年生):全体

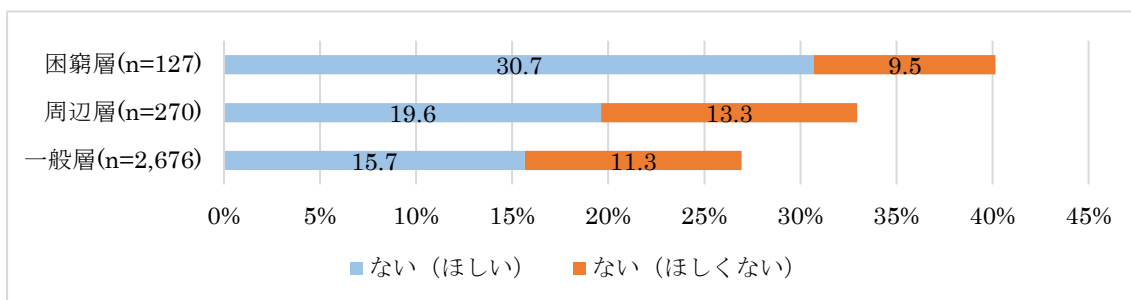


「自分専用の勉強机」について、生活困難度別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学校 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 15.7%であるが、困窮層では 30.7%であり、一般層より 15.0 ポイント高い。

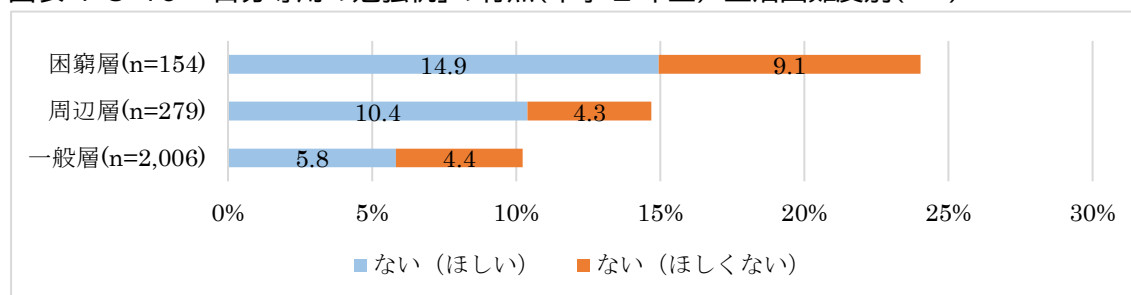
中学 2 年生でも同様の傾向がみられ、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 5.8%であるが、困窮層では 14.9%であり、一般層より 9.1 ポイント高かった。

図表 4-3-9 「自分専用の勉強机」の有無(小学 5 年生):生活困難度別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

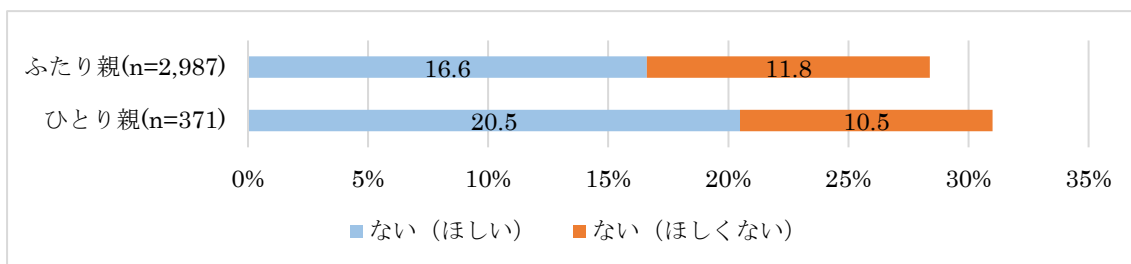
図表 4-3-10 「自分専用の勉強机」の有無(中学 2 年生):生活困難度別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

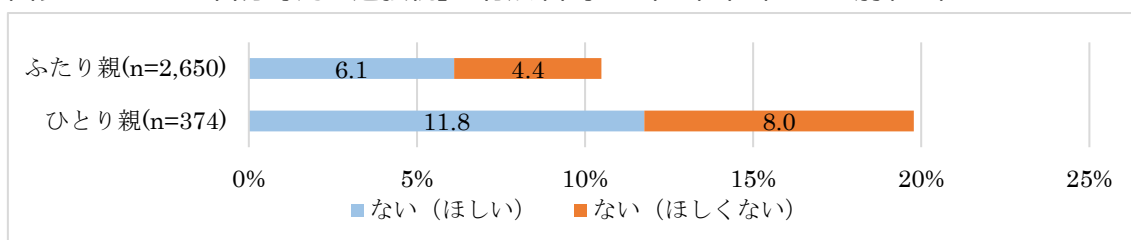
「自分専用の勉強机」について、世帯タイプ別で見ると、中学 2 年生のみ統計的に有意な差が見られた。中学 2 年生では、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 6.1%であるが、ひとり親世帯では 11.8%であり、ひとり親世帯のほうが 5.7 ポイント高くなっている。

図表 4-3-11 「自分専用の勉強机」の有無(小学5年生):世帯タイプ別(X)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

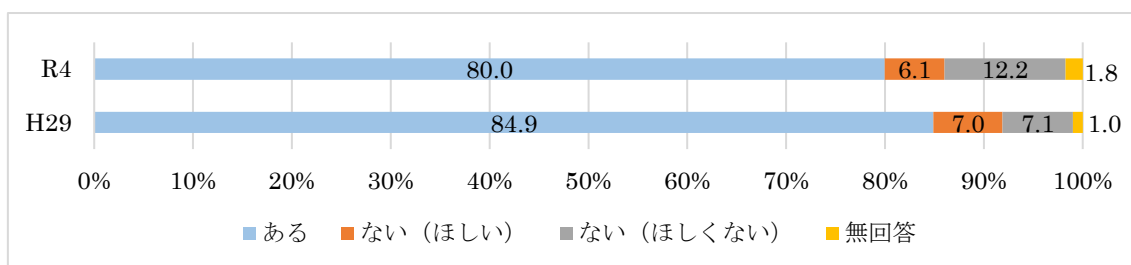
図表 4-3-12 「自分専用の勉強机」の有無(中学2年生):世帯タイプ別(***)



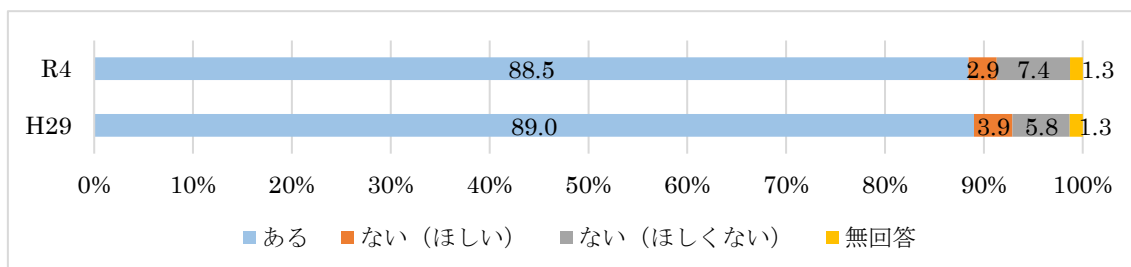
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

次の「自分だけの本(学校の教科書やマンガはのぞく)」については、小学5年生の80.0%、中学2年生の88.5%が「ある」としている一方、小学5年生の6.1%、中学2年生の2.9%が「ない(ほしい)」と回答している。前回調査(H29)では小学5年生の84.9%、中学2年生の89.0%が「ある」としている一方、小学5年生の7.0%、中学2年生の3.9%が「ない(ほしい)」と回答していた。

図表 4-3-13 「自分だけの本」の有無(小学5年生):全体



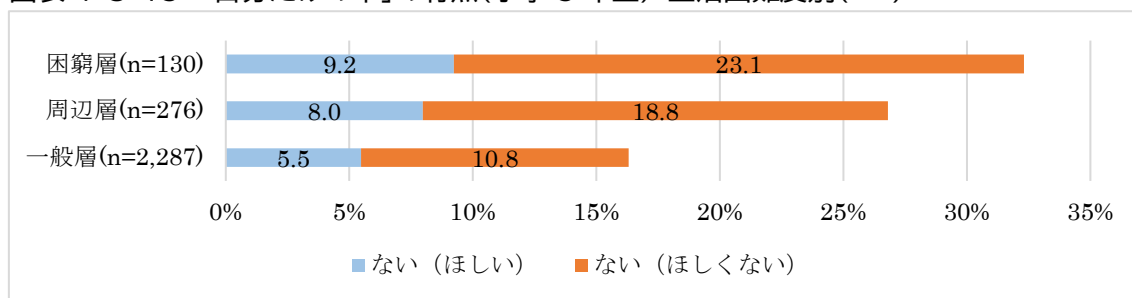
図表 4-3-14 「自分だけの本」の有無(中学2年生):全体



「自分だけの本」について、生活困難度別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

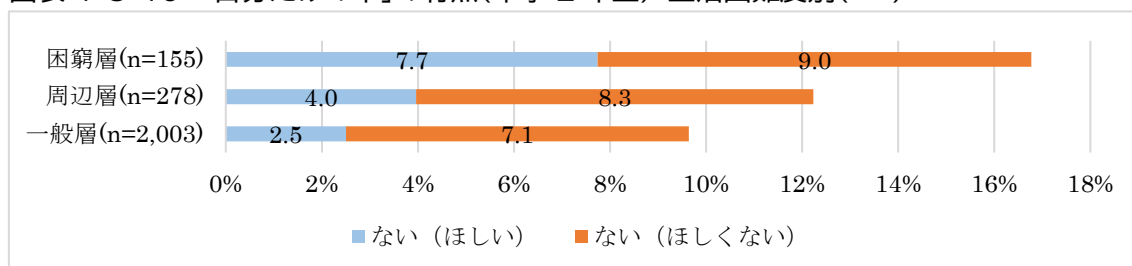
小学 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 5.5%であるが、困窮層では 9.2%であり、一般層より 3.7 ポイント高い。中学 2 年生では、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 2.5%であるが、困窮層では 7.7%であり、5.2 ポイント高い。

図表 4-3-15 「自分だけの本」の有無(小学 5 年生):生活困難度別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

図表 4-3-16 「自分だけの本」の有無(中学 2 年生):生活困難度別(***)



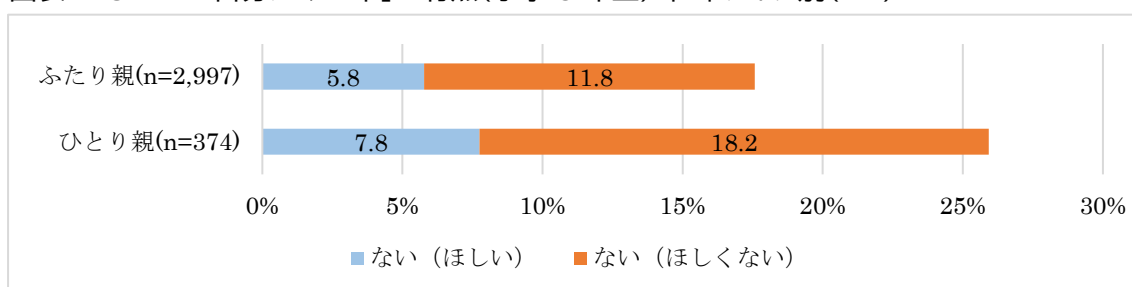
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

「自分だけの本」について、世帯タイプ別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 5.8%であるが、ひとり親世帯では 7.8%であり、ひとり親世帯のほうが 2.0 ポイント高い。

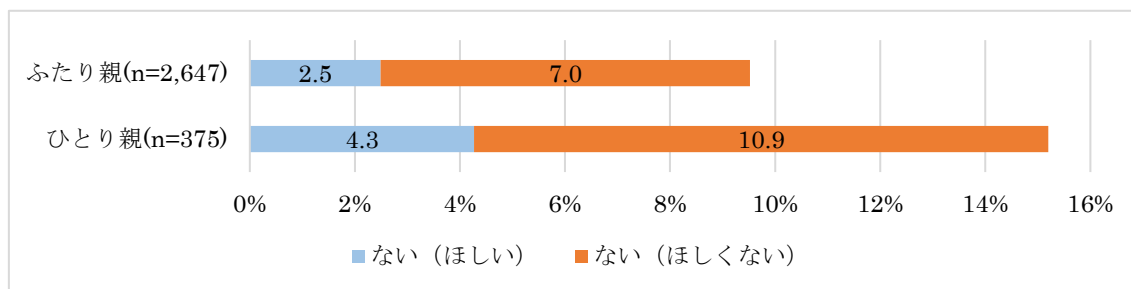
中学 2 年生でも、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 2.5%であるが、ひとり親世帯では 4.3%であり、ひとり親世帯のほうが 1.8 ポイント高い。

図表 4-3-17 「自分だけの本」の有無(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

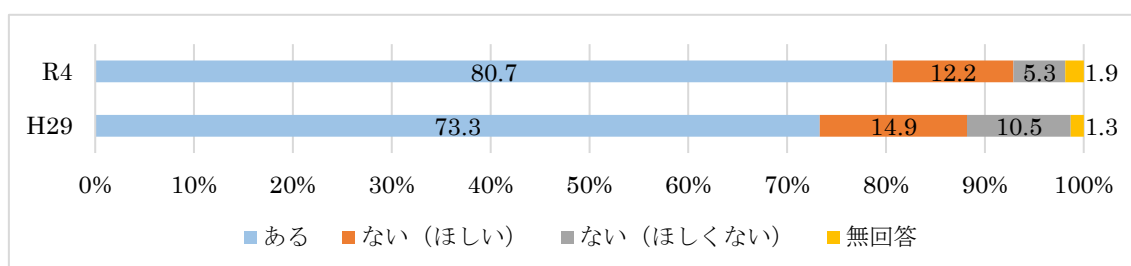
図表 4-3-18 「自分だけの本」の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)



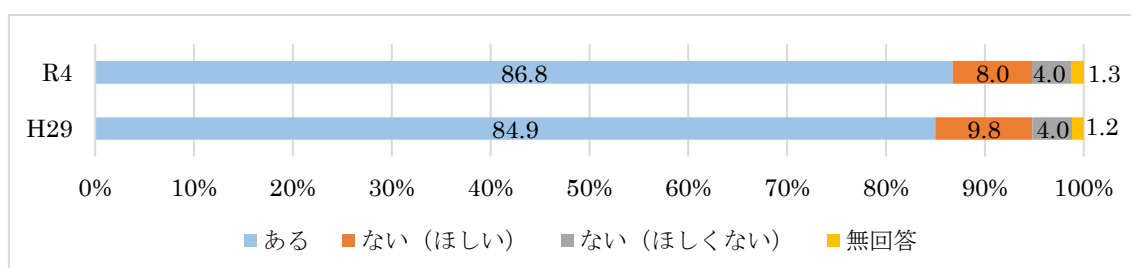
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」は、小学 5 年生の 80.7%、中学 2 年生の 86.8%が「ある」としている一方、小学 5 年生の 12.2%、中学 2 年生の 8.0%が「ない(ほしい)」としている。前回調査(H29)では「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」は、小学 5 年生の 73.3%、中学 2 年生の 84.9%が「ある」としている一方、小学 5 年生の 14.9%、中学 2 年生の 9.8%が「ない(ほしい)」としていた。

図表 4-3-19 「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」の有無(小学 5 年生):全体



図表 4-3-20 「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」の有無(中学 2 年生):全体

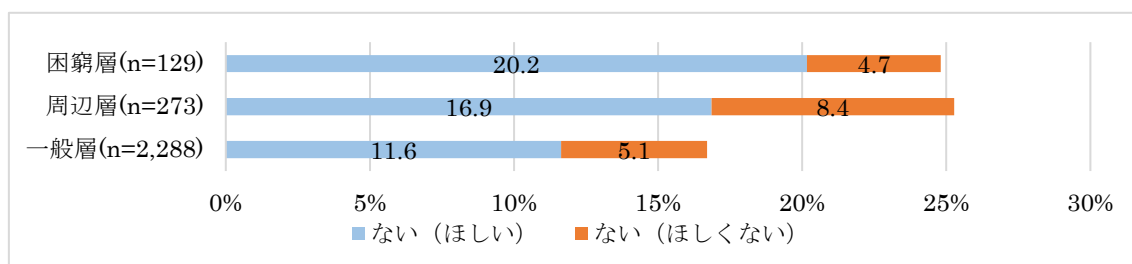


「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」について、生活困難度別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 11.6%であるが、困窮層では 20.2%であり、一般層より 8.6 ポイント高い。

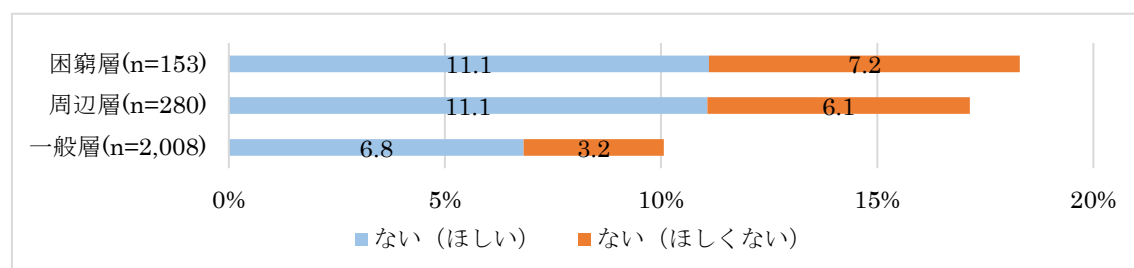
中学 2 年生では、「ない(ほしい)」と回答している人は、一般層で 6.8%であるが、困窮層と周辺層どちらも 11.1%であった。

図表 4-3-21 「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」の有無(小学 5 年生):生活困難度別(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

図表 4-3-22 「自宅でインターネットにつながるパソコン」の有無(中学 2 年生):生活困難度別(***)



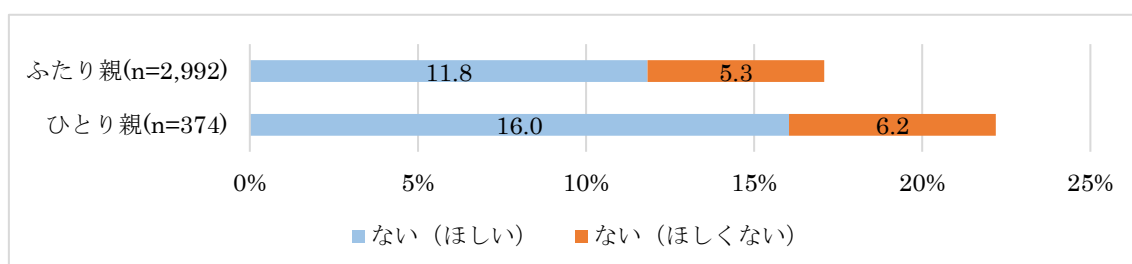
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

「(自宅で)インターネットにつながるパソコン」について、世帯タイプ別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生で、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 11.8%であるが、ひとり親世帯では 16.0%であり、ひとり親世帯のほうが 4.2 ポイント高い。

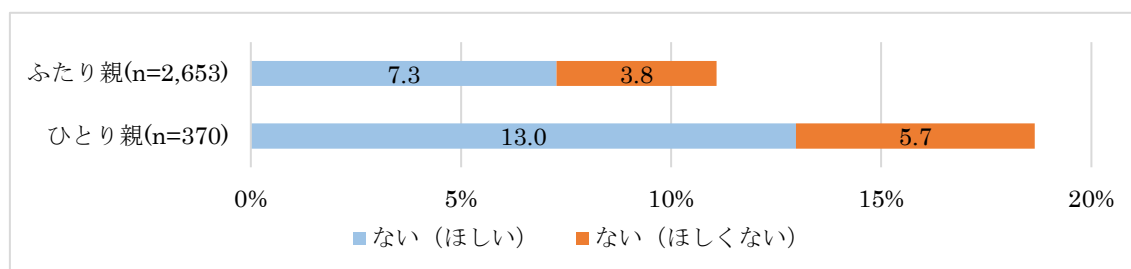
中学 2 年生では、「ない(ほしい)」と回答している人は、ふたり親世帯では 7.3%であるが、ひとり親世帯では 13.0%であり、ひとり親世帯のほうが 5.7 ポイント高くなっている。

図表 4-3-23 「自宅でインターネットにつながるパソコン」の有無(小学 5 年生):世帯タイプ別(**)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。

図表 4-3-24 「自宅でインターネットにつながるパソコン」の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)



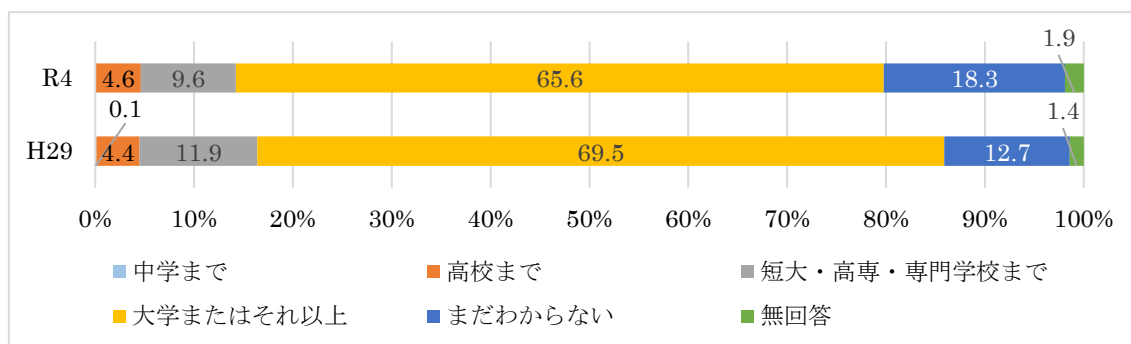
※無回答は欠損処理をして分析を行った。

4. 親の進学期待

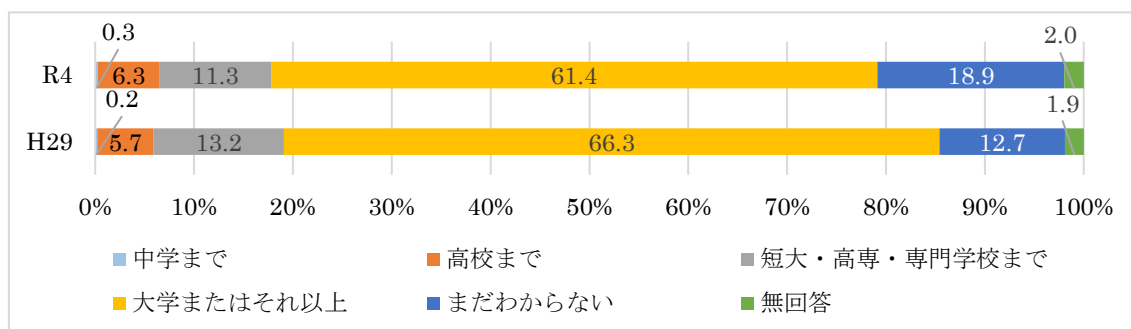
本節では、親の進学期待が子どもの学力にも影響するとの観点から、親の進学期待に着目する。保護者票の問 11「お子さんに、どの段階までの教育を受けさせたいと考えていますか。あなたのお考えに最も近いものに○をつけてください。」の問いに対する回答を報告する。

小学 5 年生の保護者の 9.6%が子どもを「短大・高専・専門学校まで」、65.6%が「大学またはそれ以上」まで進学させたいと考えている一方で、中学 2 年生の保護者ではそれぞれ 11.3%、61.4%、また「高校まで」が 6.3%と、やや「大学またはそれ以上」と回答する親の割合が減少し、高校から専門学校卒と回答する保護者の割合が増加する傾向にある。

図表 4-4-1 子どもに受けさせたい教育レベル(小学 5 年生):全体

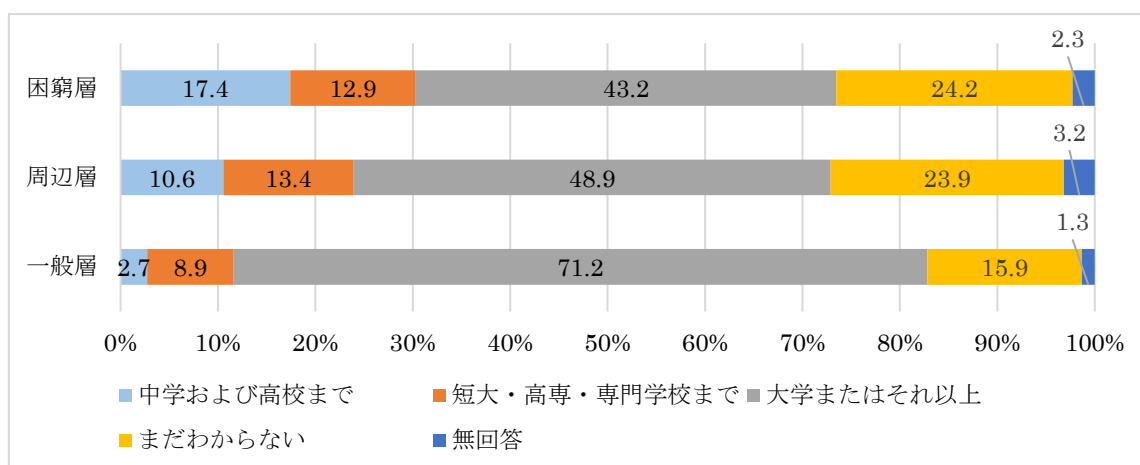


図表 4-4-2 子どもに受けさせたい教育レベル(中学 2 年生):全体



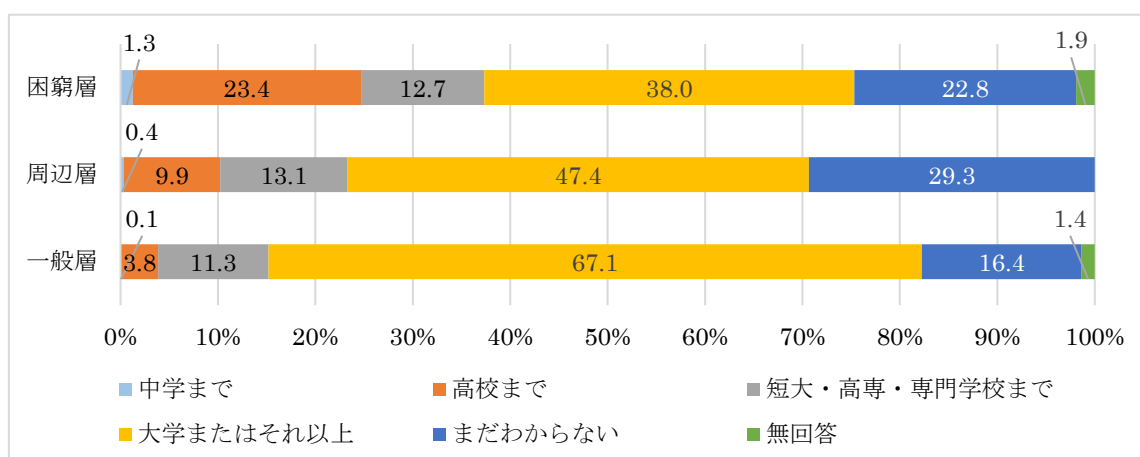
生活困難度別にみると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれにおいても統計的に有意な差が見られる。小学 5 年生では、「中学まで」または「高校まで」と回答した保護者の割合は困窮層で 17.4%、周辺層で 10.6%、一般層で 2.7%であり、困窮層は一般層と比較すると 14.7 ポイント高い。中学 2 年生も「中学まで」「高校まで」を合わせた割合は、困窮層で 24.7%、周辺層が 10.3%、一般層が 3.9%であり、困窮層は一般層と比較すると 20.8 ポイント高い。また、「大学またはそれ以上」と回答した保護者は、小学 5 年生では困窮層で 43.2%、周辺層で 48.9%、一般層で 71.2%であり、一般層は困窮層と比較すると 28.0 ポイント高い。中学 2 年生では困窮層で 38.0%、周辺層で 47.4%、一般層で 67.1%であり、一般層は困窮層と比較すると 29.1 ポイント高い。以上より、困窮層は一般層と比較すると、中学・高校までを希望する割合が高く、「大学またはそれ以上」を希望する割合は低い傾向がある。

図表 4-4-3 子どもに受けさせたい教育レベル(小学 5 年生):生活困難度別(***)



※ここでは「中学まで」の度数がほぼ0であるため、「中学まで」「高校まで」と合わせて集計および検定を行っている。なお度数および他の割合は付表に同じである。

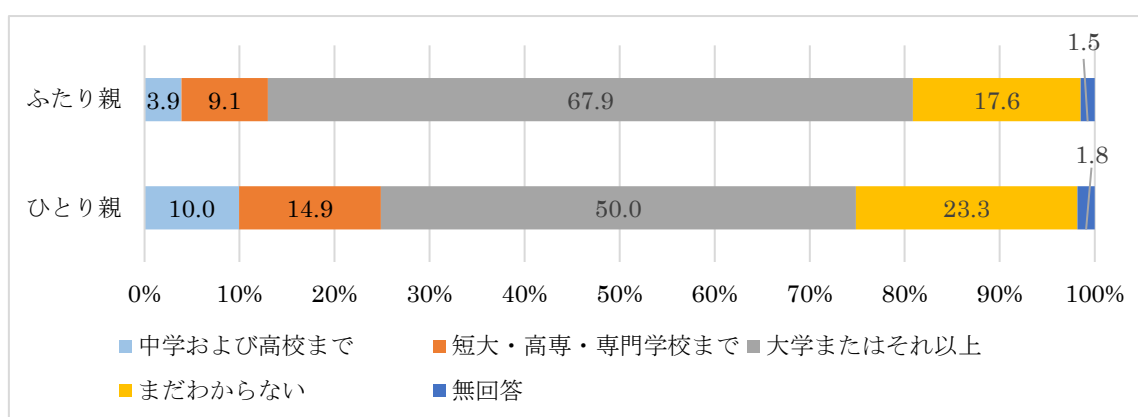
図表 4-4-4 子どもに受けさせたい教育レベル(中学 2 年生):生活困難度別(***)



世帯タイプ別にみても、小学5年生、中学2年生いずれにおいても、統計的に有意な差がみられる。小学5年生では、「中学まで」または「高校まで」と回答した保護者はふたり親世帯で3.9%、ひとり親世帯で10.0%であり、ひとり親世帯はふたり親世帯と比較して6.1ポイント高い。中学2年生も「中学まで」「高校まで」を合わせた割合は、ふたり親世帯で5.3%、ひとり親世帯で15.2%であり、ひとり親世帯はふたり親世帯と比較して9.9ポイント高い。また、「大学またはそれ以上」と回答した保護者は、小学5年生ではふたり親世帯で67.9%、ひとり親世帯で50.0%であり、ふたり親世帯はひとり親世帯と比較して17.9ポイント高い。中学2年生では、ふたり親世帯で64.0%、ひとり親世帯で45.9%であり、ふたり親世帯はひとり親世帯と比較して18.1ポイント高い。以上より、ひとり親世帯はふたり親世帯と比較すると、中学・高校までを希望する割合が高く、「大学またはそれ以上」を希望する割合は低い傾向がある。

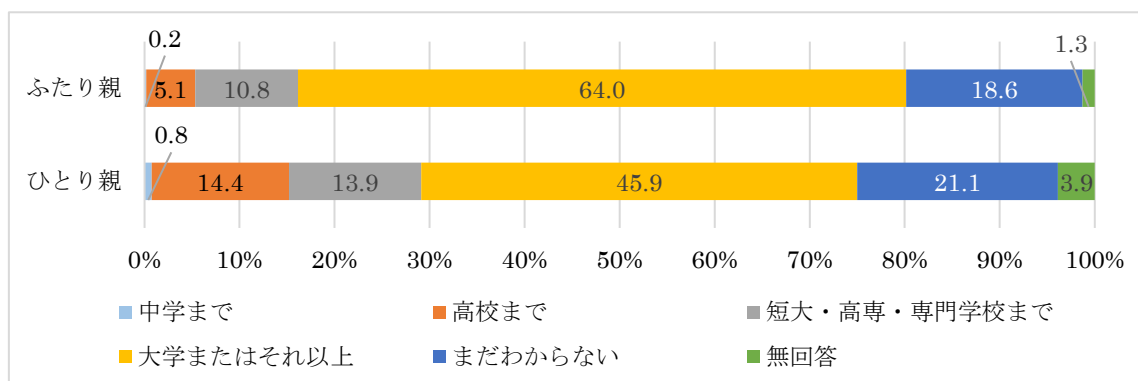
大学進学には、通塾のための費用や入学費用、学費等多くの費用を必要とするため、困窮層やひとり親世帯では「大学またはそれ以上」を希望する割合が低いということが考えられる。

図表 4-4-5 子どもに受けさせたい教育レベル(小学5年生):世帯タイプ別(***)



※ここでは「中学まで」の度数がほぼ0であるため、「中学まで」「高校まで」と合わせて集計および検定を行っている。なお度数および他の割合は付表に同じである。

図表 4-4-6 子どもに受けさせたい教育レベル(中学2年生):世帯タイプ別(***)

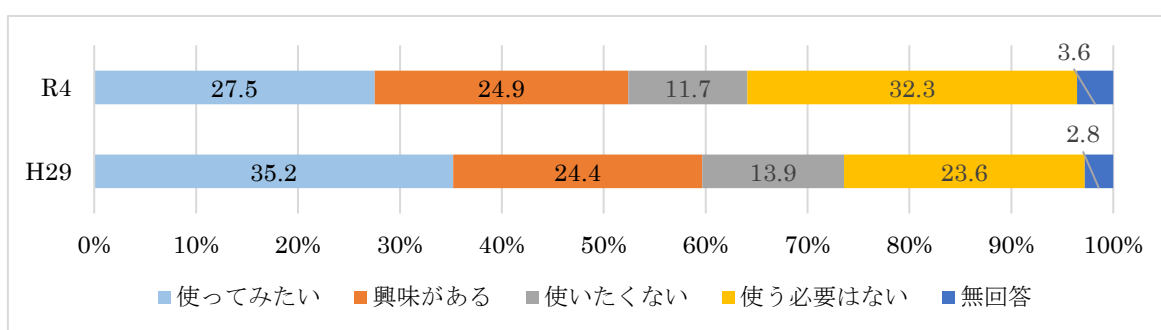


5. 学習関連の支援事業の利用状況と利用意向

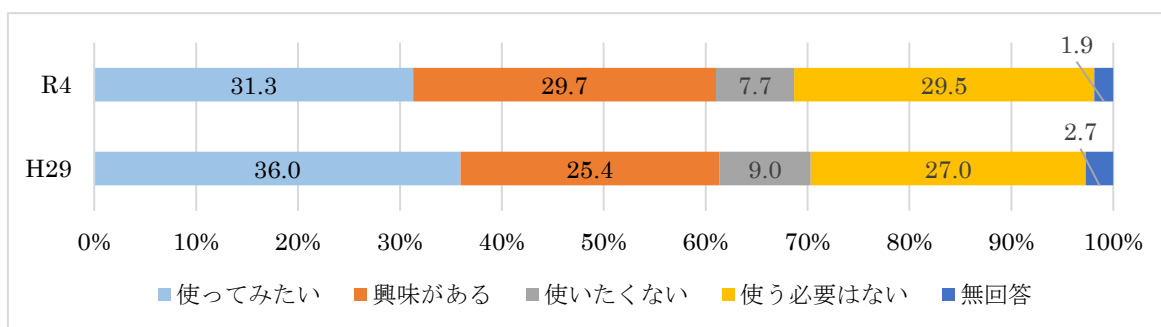
(1) 静かに勉強ができる場所の利用意向

本節では、学習関連の支援事業の利用状況と利用意向に着目する。子ども本人に「あなたは、以下のような場所があれば使ってみたいと思いますか」と質問したところ、「D家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」を「使ってみたい」と答えたのは、小学5年生の27.5%、中学2年生の31.3%であり、「興味がある」と回答した子どもを合わせると、半数以上に利用意向がある。前回調査では「使ってみたい」と答えたのは、小学5年生の35.2%、中学2年生の36.0%であった。

図表 4-5-1 家で勉強できない時に静かに勉強できる場所の利用意向(小学5年生)

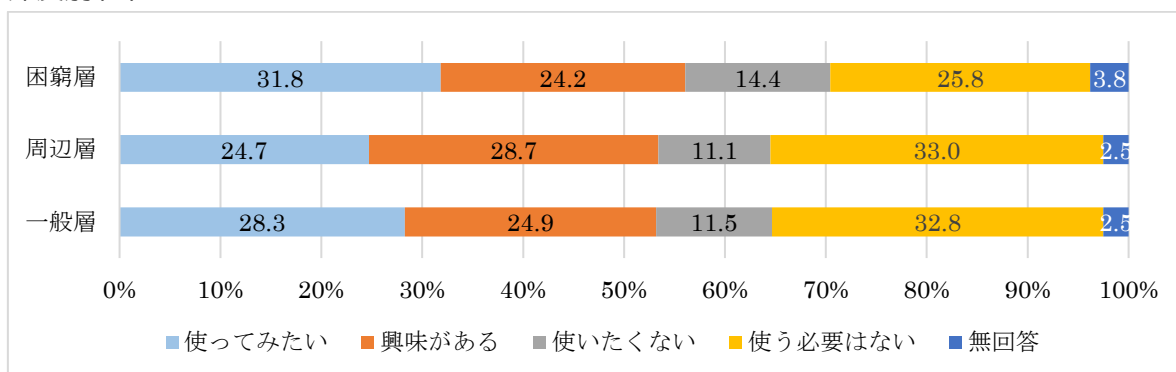


図表 4-5-2 家で勉強できない時に静かに勉強できる場所の利用意向(中学2年生)

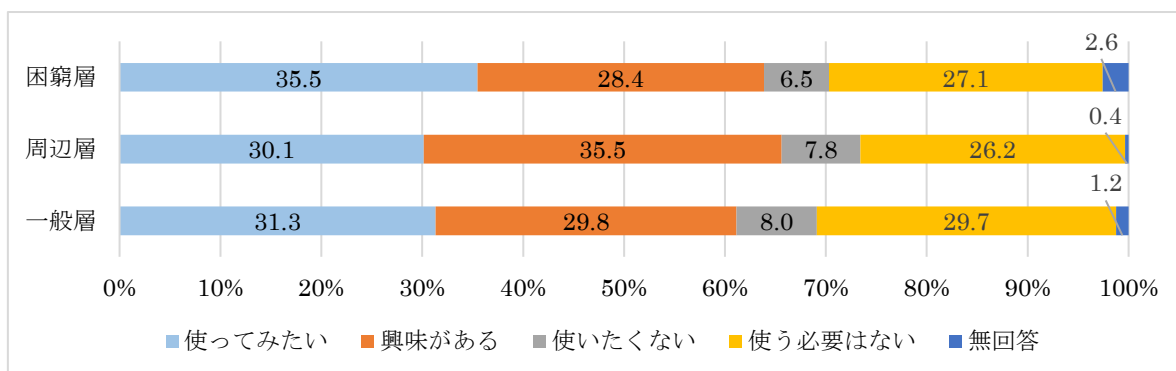


この利用意向は小学5年生、中学2年生いずれにおいても、生活困難度で利用意向に統計的に有意な差はみられず、「勉強ができる場所」のニーズは普遍的にあることが分かる。

図表 4-5-3 家で勉強できない時に静かに勉強できる場所の利用意向(小学 5 年生):生活困難度別(X)



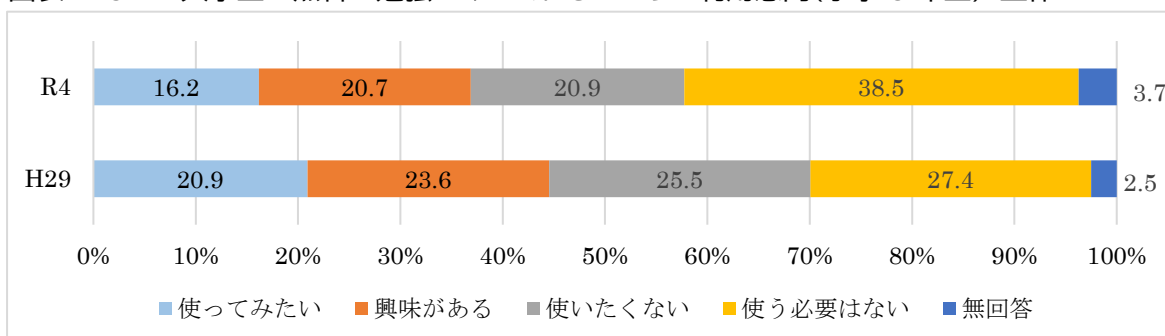
図表 4-5-4 家で勉強できない時に静かに勉強できる場所の利用意向(中学 2 年生):生活困難度別(X)



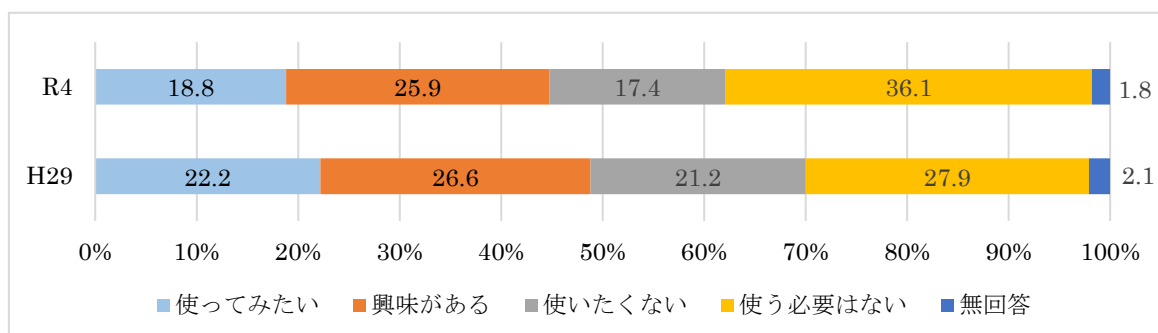
(2)大学生による学習支援の利用意向

「E 大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料で見てくれる場所」については、小学 5 年生は 16.2%、中学 2 年生は 18.8%が「使ってみたい」と答えており、「興味がある」を合わせると小学 5 年生の 36.9%、中学 2 年生の 44.7%に利用意向がある。また、前回調査では「使ってみたい」「興味がある」と回答した割合は小学 5 年生では 44.5%、中学 2 年生では 48.8%であった。

図表 4-5-7 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(小学 5 年生):全体

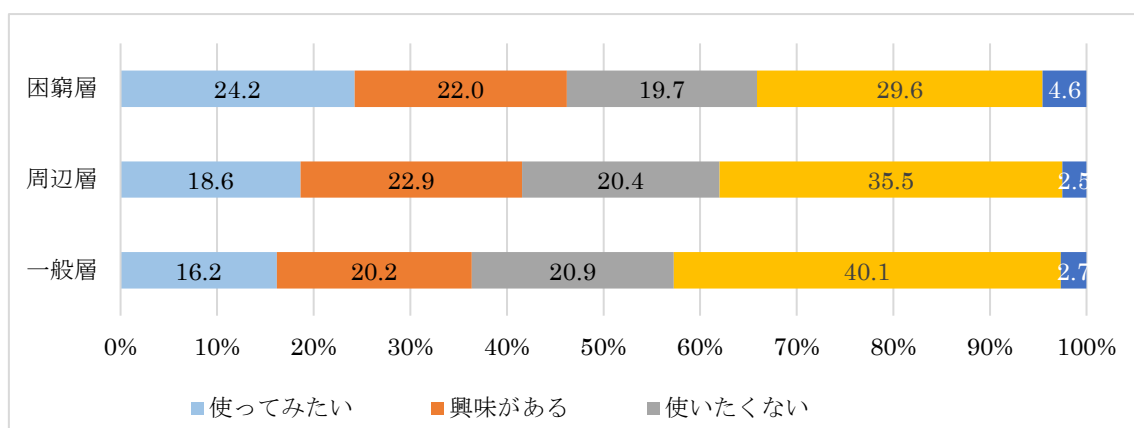


図表 4-5-8 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(中学 2 年生):全体

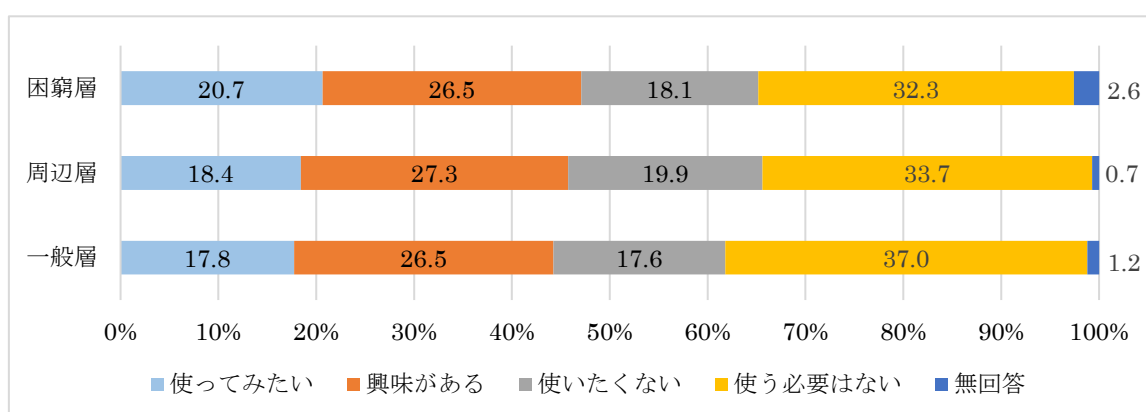


小学 5 年生、中学 2 年生の生活困難度別の結果では統計的には有意な差が見られなかったが、世帯タイプ別ではどちらも統計的に有意な差が見られた。「使ってみたい」「興味がある」と回答した割合は小学 5 年生、中学 2 年生ともにふたり親世帯と比較してひとり親世帯の方がやや高い傾向が見られる。

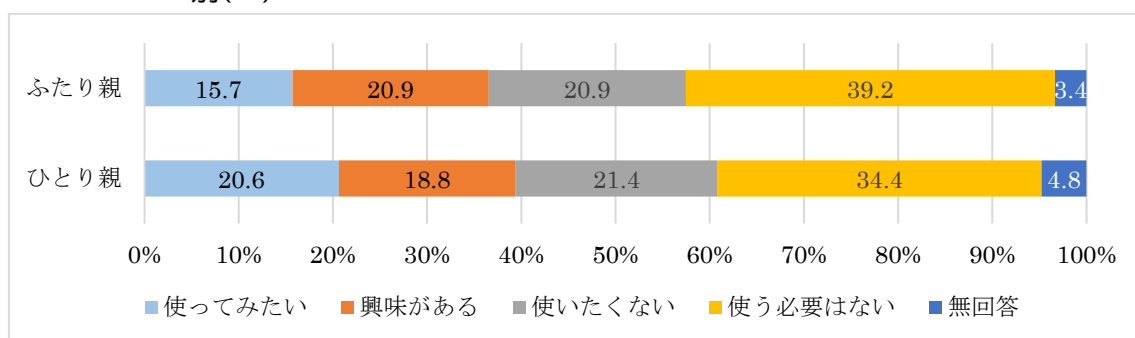
図表 4-5-9 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(小学 5 年生):世帯困難度別(X)



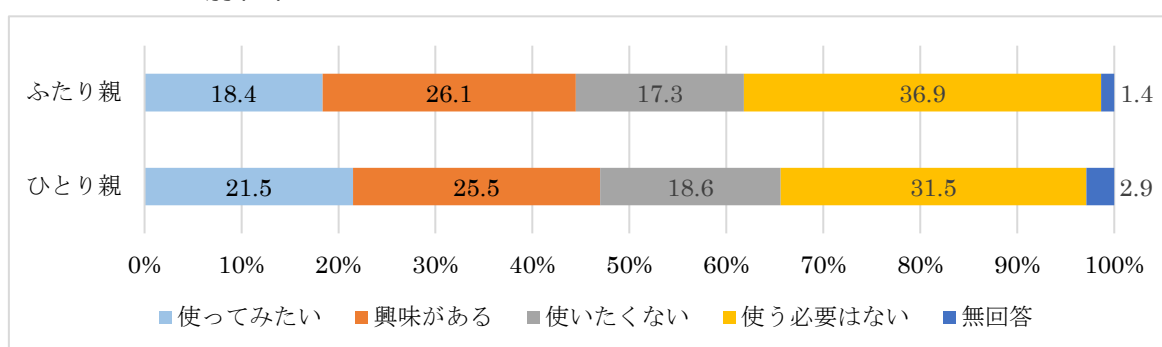
図表 4-5-10 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(中学 2 年生):生活困難度別(X)



図表 4-5-11 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(小学 5 年生):世帯タイプ別(**)



図表 4-5-12 大学生が無料で勉強をみてくれるところの利用意向(中学 2 年生):世帯タイプ別(**)



(3)学習支援に関する保護者の利用状況と利用意向

● 学習支援に関する保護者の利用状況

保護者からみた学習支援関連のサービスの利用実態と今後の利用意向を見る。保護者票問 40 の「お子さんについて、以下の A-I の支援制度などをこれまでに利用したことがありますか。利用したことがない場合は、その理由に最も近いものに○をつけてください。」という質問について、「G 学校が実施する補講(学習支援)」(以下、〈学内の学習支援〉)、「H 学校以外が実施する無料の学習支援」(以下、〈学外の学習支援〉)の回答を見る。

まず、〈学内の学習支援〉については、小学 5 年生の保護者の 21.7%および中学 2 年生の保護者の 26.5%が「利用したことがある」と答えた。前回調査では「G 学校が実施する補講(学習支援)」について「利用したことがある」と答えている割合について、小学 5 年生では 24.3%、中学 2 年生では 26.0%であった。

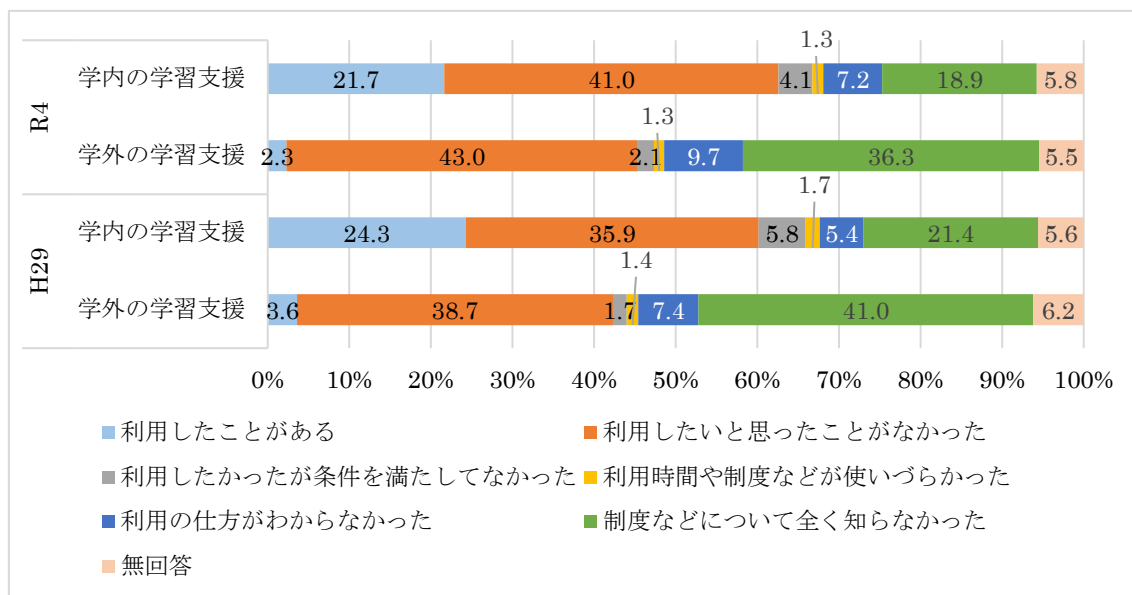
〈学外の学習支援〉の利用割合は低く、小学 5 年生では 2.3%、中学 2 年生で 5.0%の保護者が「利用したことがある」と回答するにとどまっている。

「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合は、〈学内の学習支援〉では小学 5 年生では 18.9%、中学 2 年生では 15.1%であるが、〈学外の学習支援〉では、小学 5 年生の 36.3%、中学 2 年生の 32.1%と 3 割以上となっている。前回調査では、「H 学校以外が実施する学習支援」について「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合は小学 5 年

生の41.0%、中学2年生の43.7%であった。

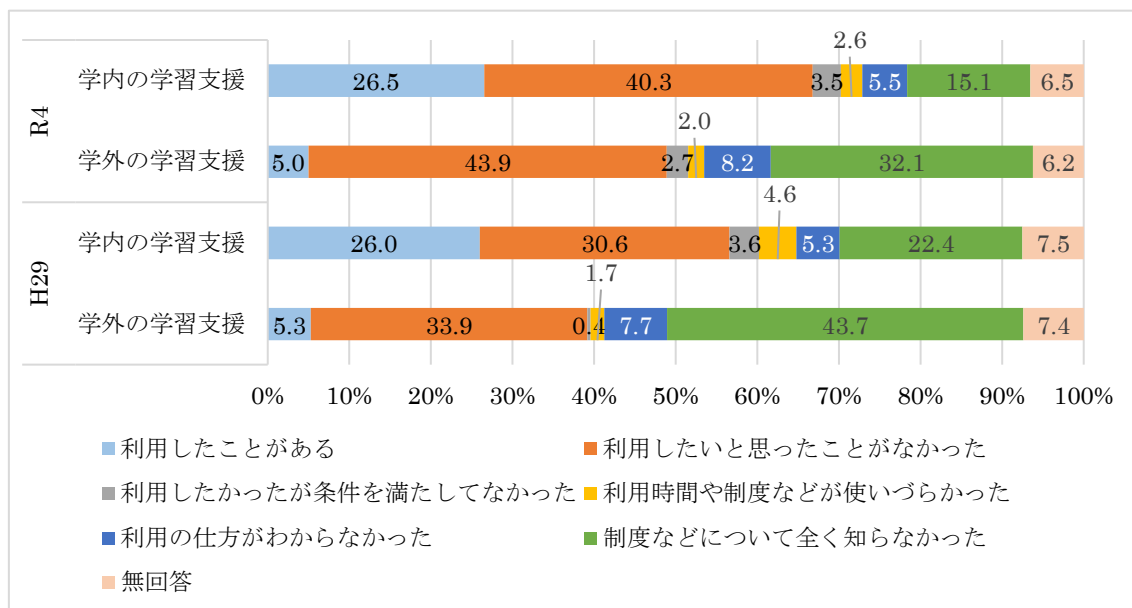
その他、「利用したかったが、条件を満たしていなかった」「利用時間や制度などが使いづらかった」「利用の仕方がわからなかった」など、制度を認知していても利用に至らなかった層も合わせると、〈学内の学習支援〉〈学外の学習支援〉ともに1割以上存在している。

図表 4-5-15 学内外における学習支援に関する保護者の利用状況(小学5年生):全体



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する無料の学習支援」の表記を「学外」とした。

図表 4-5-16 学内外における学習支援に関する保護者の利用状況(中学2年生):全体

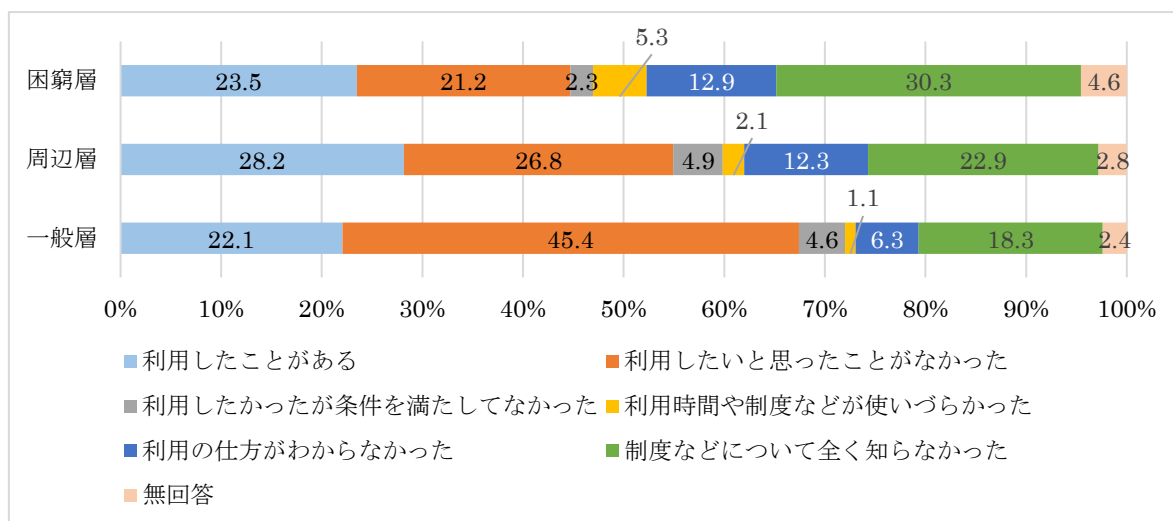


※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する無料の学習支援」の表記を「学外」とした。

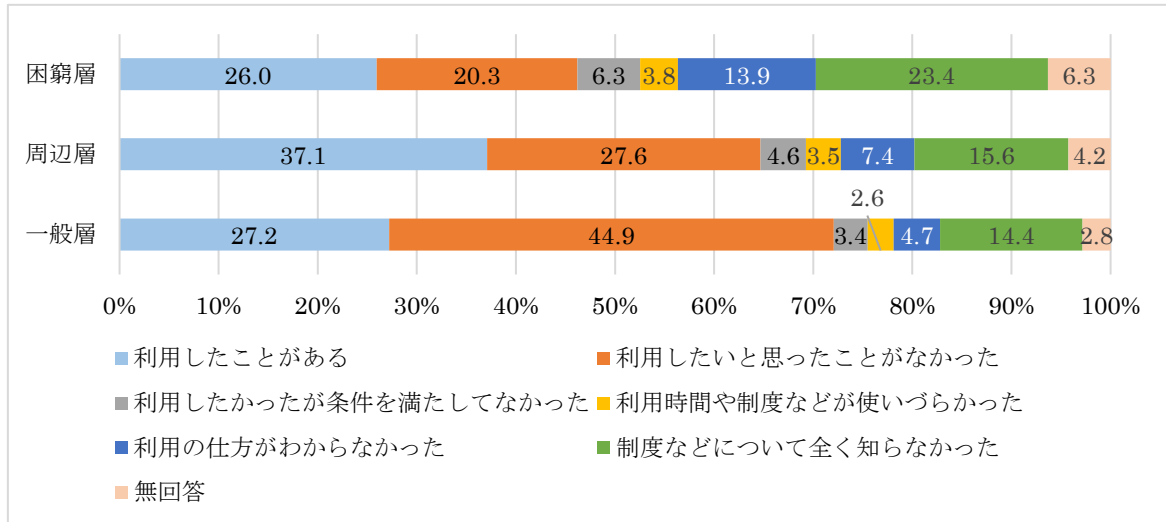
学内における学習支援に関する保護者の利用状況については、生活困難度別、世帯タイプ別に見るといずれの学年においても統計的に差が見られる。

生活困難度別に見ると小学 5 年生で、「利用したことがある」と回答した割合は、一般層が 22.1%、周辺層が 28.2%、困窮層は 23.2%と、一般層と比較すると周辺層や困窮層の方が「利用したことがある」と回答した割合がやや高い。一方で、中学 2 年生で「利用したことがある」と回答した割合は一般層が 27.2%、周辺層が 37.1%、困窮層が 26.0%であった。一般層と比較すると、周辺層は 9.9 ポイント高いが、困窮層は 1.2 ポイントとむしろ低い結果となった。特に生活困難度別で差が生じている回答は「利用の仕方がわからなかった」「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合であった。「利用の仕方がわからなかった」「制度などについて全く知らなかった」を合わせた割合を比較すると、小学 5 年生では一般層が 24.6%、周辺層が 35.2%、困窮層が 43.2%であり一般層と比較して、困窮層のほうが 18.6 ポイント高い結果となった。中学 2 年生では、一般層が 19.1%、周辺層が 23.0%、困窮層が 37.3%であり一般層と比較して困窮層のほうが 18.2 ポイント高い結果となった。

図表 4-5-17 学習支援に関する保護者の利用状況〈学内の学習支援〉(小学 5 年生):生活困難度別(***)



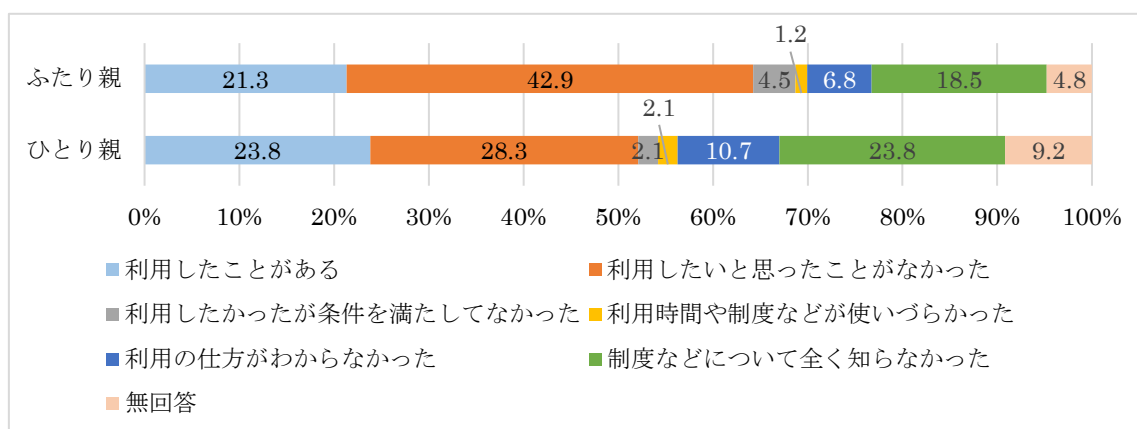
図表 4-5-18 学習支援に関する保護者の利用状況〈学内の学習支援〉(中学 2 年生):生活困難度別(***)



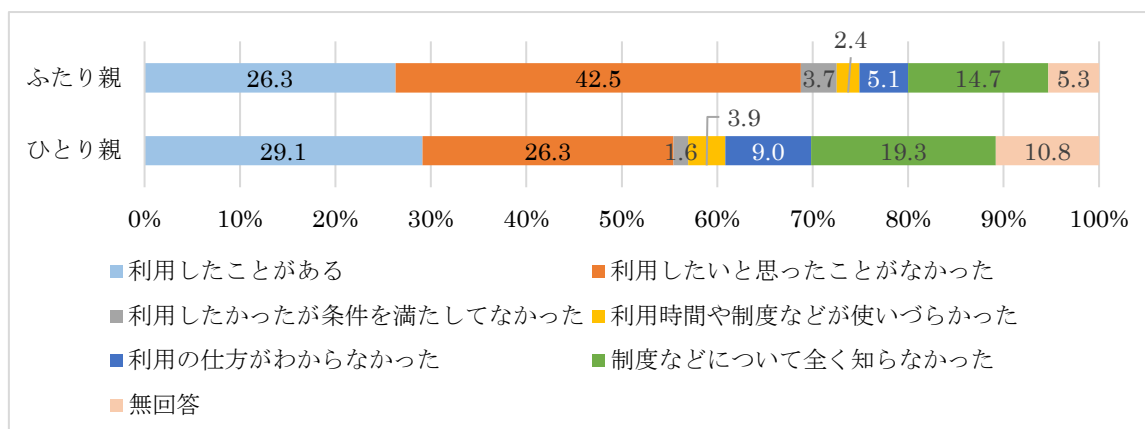
世帯タイプ別に見ると小学 5 年生で「利用したことがある」と回答した割合は、ふたり親世帯が 21.3%、ひとり親世帯は 23.8%とひとり親世帯の方が「利用したことがある」と回答した割合がやや高い。中学 2 年生では、ふたり親世帯が 26.3%、ひとり親世帯 29.1%と小学 5 年生と同様にひとり親世帯の方が「利用したことがある」と回答した割合がやや高い。また、生活困難度別と同様に世帯タイプ別でも差が生じている回答は、「利用の仕方がわからなかった」「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合であり、両者を合わせた割合を比較すると、小学 5 年生ではふたり親世帯が 25.3%、ひとり親世帯が 34.5%であり、ふたり親世帯と比較するとひとり親世帯の方が 9.2 ポイント高い結果となった。中学 2 年生では、ふたり親世帯が 19.8%、ひとり親世帯が 28.3%であり、ふたり親世帯と比較するとひとり親世帯の方が 8.5 ポイント高い結果となった。

以上より、生活困難度別では一般層より困窮層が、世帯別ではふたり親世帯よりひとり親世帯の方が、〈学内の学習支援〉に関する制度についての情報が行き届いていないことが考えられる。

図表 4-5-19 学習支援に関する保護者の利用状況〈学内の学習支援〉(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



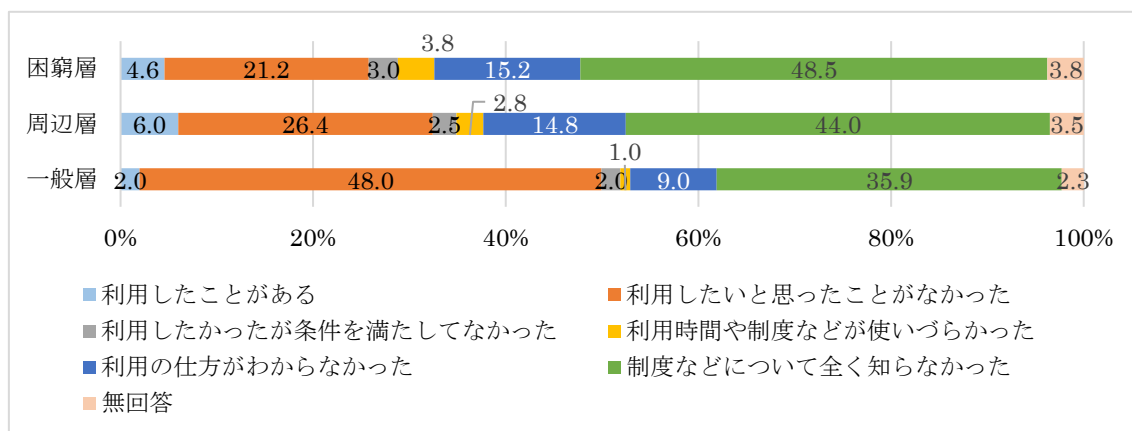
図表 4-5-20 学習支援に関する保護者の利用状況〈学内の学習支援〉(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)



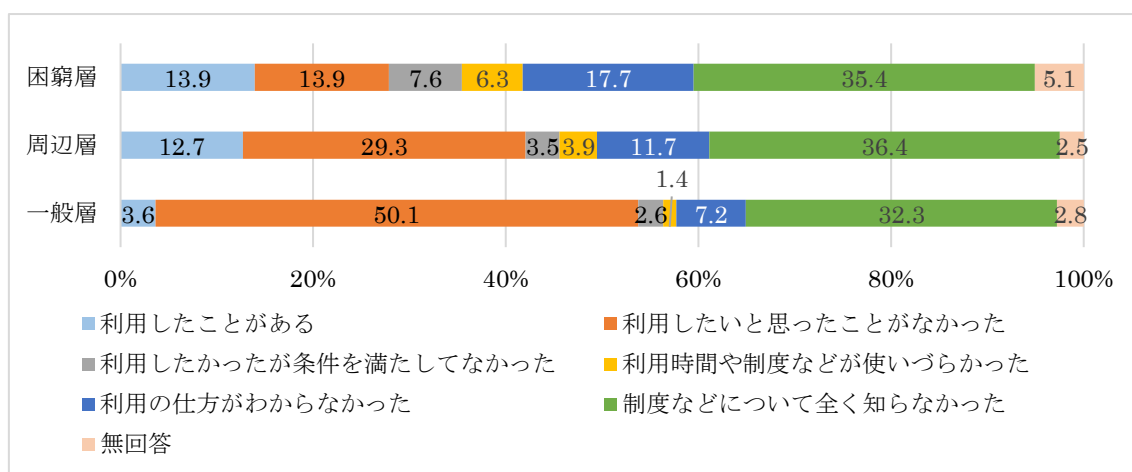
〈学外の学習支援〉に関する保護者の利用意向についても、〈学内の学習支援〉と同様に生活困難度別、世帯タイプ別に見るといずれの学年においても統計的に差が見られる。

生活困難度別に見ると小学 5 年生で、「利用したことがある」と回答した割合は、一般層が 2.0%、周辺層が 6.0%、困窮層が 4.6%と、一般層と比較すると周辺層や困窮層の方が「利用したことがある」と回答した割合がやや高い。中学 2 年生では一般層が 3.6%、周辺層が 12.7%、困窮層が 13.9%と、一般層と比較すると困窮層が「利用したことがある」と回答した割合の方が 10.3 ポイント高い結果となった。特に生活困難度別で差が生じている回答は「利用の仕方がわからなかった」「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合であり、両者を合わせた割合を比較すると、小学 5 年生では一般層が 44.9%、周辺層が 58.8%、困窮層が 63.7%であり一般層と比較すると困窮層が 18.8 ポイント高い結果となった。中学 2 年生では、一般層が 39.5%、周辺層が 48.1%、困窮層が 53.1%であり一般層と比較すると困窮層が 13.6 ポイント高い結果となった。

図表 4-5-21 学習支援に関する保護者の利用状況<学外の学習支援>(小学 5 年生):生活困難度別(***)



図表 4-5-22 学習支援に関する保護者の利用状況<学外の学習支援>(中学 2 年生):生活困難度別(***)

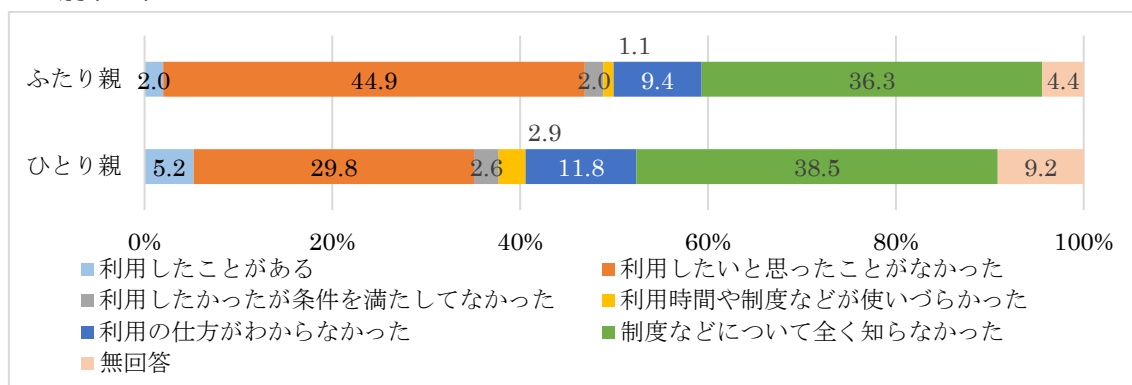


世帯タイプ別に見ると小学 5 年生で「利用したことがある」と回答した割合は、ふたり親世帯が 2.0%、ひとり親世帯 5.2%と、ひとり親世帯の方が「利用したことがある」と回答した割合がやや高い。中学 2 年生では、ふたり親世帯が 2.9%、ひとり親世帯が 19.9%と、ふたり親世帯と比較すると、ひとり親世帯の方が 17.0 ポイント高い結果となった。また、生活困難度と同様に世帯タイプでも差が生じている回答は、「利用の仕方がわからなかった」「制度などについて全く知らなかった」と回答した割合であり、両者を合わせた割合を比較すると、小学 5 年生ではふたり親世帯が 45.7%、ひとり親世帯が 50.3%であり、ふたり親世帯と比較すると、ひとり親世帯の方が 4.6 ポイント高い結果となった。中学 2 年生では、ふたり親世帯が 41.7%、ひとり親世帯が 34.1%であり、ふたり親世帯と比較するとひとり親世帯の方が 7.6 ポイント低い結果となった。

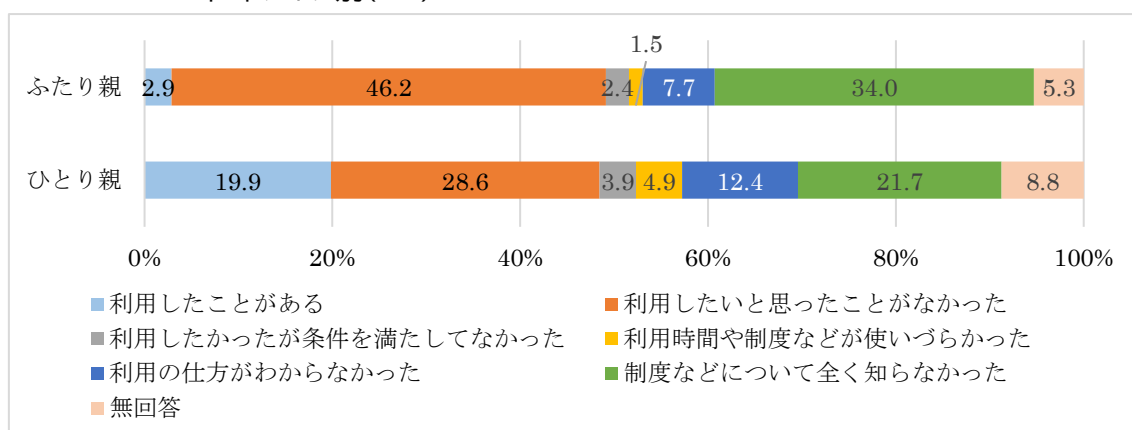
以上より、生活困難度別では一般層より困窮層が、世帯別ではふたり親世帯よりひとり親世帯の方が学外における学習支援に関する制度についての情報が行き届いていないことが考え

られる。また、〈学内の学習支援〉と比較すると、〈学外の学習支援〉は特に中学 2 年生の困窮層とひとり親の利用率が高いことが分かる。

図表 4-5-23 学習支援に関する保護者の利用状況〈学外の学習支援〉(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



図表 4-5-24 学習支援に関する保護者の利用状況〈学外の学習支援〉(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)

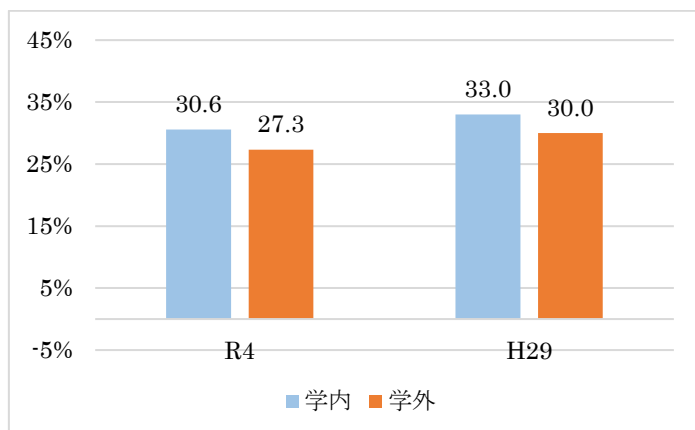


● 学習支援に関する保護者の利用意向

次に、保護者票において、「学校が実施する補講(学習支援)」(以下、〈学内の学習支援〉)、「学校以外が実施する学習支援」(以下、〈学外の学習支援〉)についての利用意向を聞いた。その回答結果が以下である。

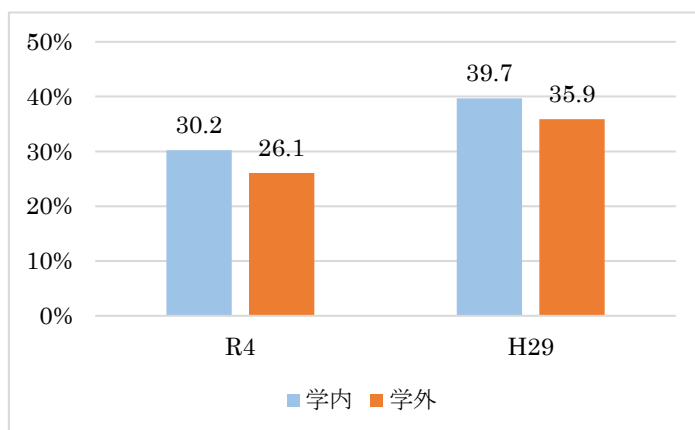
全体では、〈学内の学習支援〉に興味があると回答した保護者は小学 5 年生で 30.6%、中学 2 年生で 30.2%、〈学外の学習支援〉に興味があったとした保護者は小学 5 年生で 27.3%、中学 2 年生でそれぞれ 26.1%である。前回調査では、「学校が実施する補講」に興味があると回答した保護者は小学 5 年生で 33.0%、中学 2 年生で 39.7%、「学校以外が実施する学習支援」に興味があったとした保護者は小学 5 年生で 30.0%、中学 2 年生でそれぞれ 35.9%であった。

図表 4-5-25 学習支援に関する保護者の利用意向「興味あり」(小学 5 年生)



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。

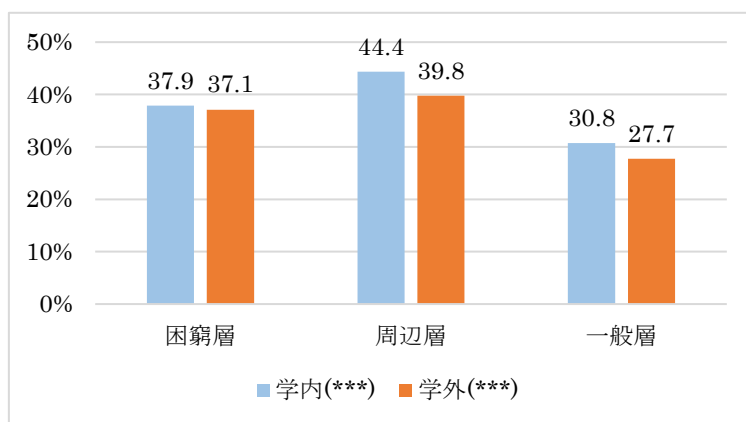
図表 4-5-26 学習支援に関する保護者の利用意向「興味あり」(中学 2 年生)



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。

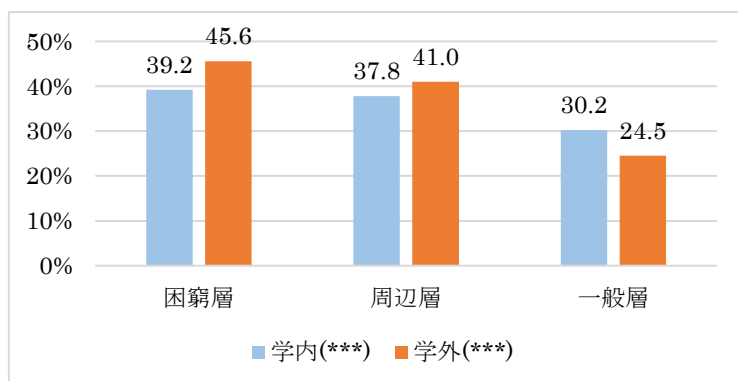
小学 5 年生では、〈学内の学習支援〉に興味があると回答した保護者は、生活困難度別では割合が高いほうから周辺層 44.4%、困窮層 37.9%、一般層 30.8%の順であった。この傾向は、〈学外での学習支援〉にも同様に見られた。中学 2 年生では、興味があると回答した保護者は、高いほうから困窮層 39.2%、周辺層 37.8%、一般層 30.2%の順であった。中学 2 年生では、〈学外の学習支援〉に興味があると回答した割合が困窮層で 45.6%、周辺層で 41.0%、一般層で 24.5%であり、一般層と比較すると困窮層を比較すると 21.1 ポイントの差が生じていた。

図表 4-5-27 学習支援に関する保護者の利用意向(学内・学外)(小学 5 年生):生活困窮度別



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。

図表 4-5-28 学習支援に関する保護者の利用意向(学内・学外)(中学 2 年生):生活困窮度別



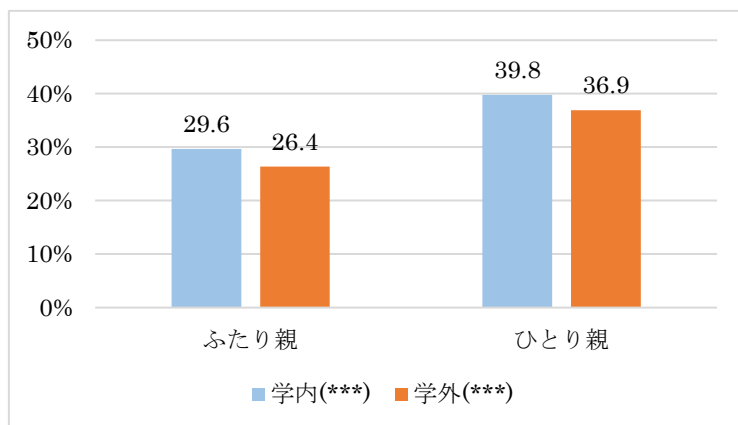
※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。

世帯タイプ別に見ると、小学 5 年生では〈学内の学習支援〉〈学外の学習支援〉に問わず、ひとり親世帯の方が興味があると回答した保護者の割合が高い。また、ふたり親世帯・ひとり親世帯ともに〈学内の学習支援〉に対して興味があると回答した割合がやや高い傾向にある。中学 2 年生では、〈学内の学習支援〉〈学外の学習支援〉に問わず、ひとり親世帯の方が興味があると回答した保護者の割合が高く、小学 5 年生の結果と同じような傾向が見られた。一方で、ふたり親世帯では、〈学内の学習支援〉と〈学外の学習支援〉を比較すると〈学内の学習支援〉に対して興味があると回答した割合がやや高い。一方でひとり親世帯では、〈学内の学習支援〉と〈学外の学習支援〉を比較すると〈学外の学習支援〉に対して興味があると回答した割合がやや高い結果となった。

以上より、中学 2 年生の保護者の回答では特に困窮層とひとり親世帯が〈学内の学習支援〉

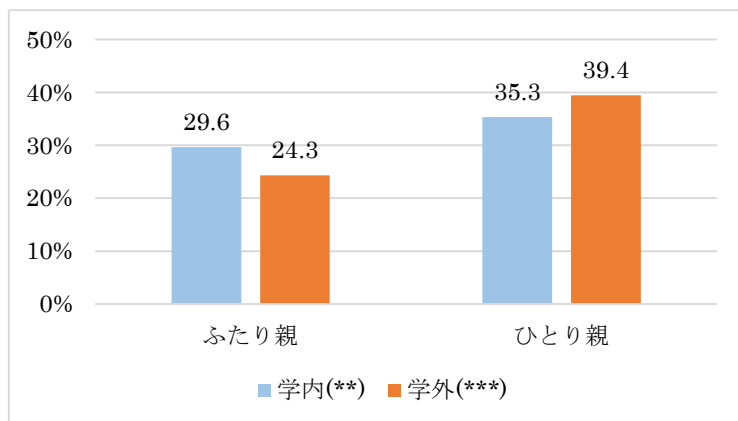
よりも〈学外の学習支援〉に興味がある割合が高いことから、一般層が通塾などで補っている学習時間の確保や高校受験への準備として活用したいと考えている保護者が多いことが考えられる。

図表 4-5-29 学習支援に関する保護者の利用意向(学内・学外)(小学5年生):世帯タイプ別



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。

図表 4-5-30 学習支援に関する保護者の利用意向(学内・学外)(中学2年生):世帯タイプ別



※作図の都合上「学校が実施する補講(学習支援)」の表記を「学内」、「学校以外が実施する学習支援」の表記を「学外」とした。